ACRYLART

アクリラート別冊2016

The Scholar 20 Perspective

The Scholar Perspective 20

アクリラート別冊２０１６

holbein

ごあいさつ

そもそも絵具とは、画家がその表現を行うのに必要な色、分量を、自らの手で作り上げるものでした。画家は自分の作品にどんな色が必要か、どうすればそれを得られるかを熟知した色材のスペシャリストでもあり、それぞれのアトリエでは秘伝のレシピに従って、長い時間をかけて、顔料とメディウムとを丹念に練り合わせていました。18世紀頃になると、画家の中から絵具の製造供給を専門に行うものが現れ、絵具は「それぞれの画家が作るもの」というものではなくなり、作品の制作者と材料の供給者の分離が進みました。産業革命以後チューブ入りの絵具が開発されると、場所や時間の制限を受けることなく創作活動を行うことが可能となり、画家はより革新的で自由な表現を発明していきます。
当時と比べれば、現在では遙かに高性能な顔料を使用できますし、アクリル樹脂やアルキド樹脂など、合成樹脂のメディウムも豊富です。我々ホルベインも絵具メーカーとして、より美しく安定した製品を画家の皆様にお届けするために、日々研究開発を行って参りました。
しかし今では、もしかすると、画家と絵具との間には少し距離ができてしまったかもしれません。より優れた色材の開発のために、最先端の素材を使用して作り上げた絵具は、画家にとって少々複雑になっているかもしれません。また我々絵具メーカーは、急速なスピードで変化し、日々新しい物語を紡ぐアートシーンや、現代の画家が求めるものを、同じように肌で感じ、理解することが出来なくなっているかもしれません。
ホルベインスカラシップは、コンテンポラリーアートの領域で活動する作家を支援するために31年間運営して参りましたが、同時に当奨学制度を通して「画家とメーカーの距離」を埋めることも目指しています。芸術活動の先端を走る画家との関わりを通して、彼らが何を見て何を考え、何を求めているのか理解すること。また道具についてもより深く理解していただくことで、その相互理解が、新たな作品創造の可能性となる事を期待しています。
2014年に選出された第29回奨学生20名の奨学期間が修了し、その成果の報告と記録のために本誌を発行いたします。画家の創造性の一部として、我々が生み出す製品群が、芸術活動の一助となることを願っております。

2016年7月

ホルベイン工業株式会社
スカラシップ実行委員会

The Scholar Perspective 20

Contents

第29回奨学者（五十音順）

青山大輔 AOYAMA Daisuke 12 ・ 34

荒川朋子 ARAKAWA Tomoko 13 ・ 37

井上光太郎 INOUE Koutaro 14 ・ 40

上野早智子 UENO Sachiko 15 ・ 43

榎倉冴香 ENOKURA Saeka 16 ・ 46

川崎愛子 KAWASAKI Aiko 17 ・ 49

ごとうなみ GOTO Nami 18 ・ 52

島村篤子 SHIMAMURA Atsuko 19 ・ 55

高柳麻美子 TAKAYANAGI Mamiko 20 ・ 58

津川奈菜 TSUGAWA Nana 21 ・ 61

内藤亜澄 NAITO Azumi 22 · 64

西村一成 NISHIMURA Issei 23 · 67

野島良太 NOJIMA Ryota 24 · 70

藤本絢子 FUJIMOTO Ayako 25 · 73

益子未知 MASUKO Michi 26 · 76

宮岡俊夫 MIYAOKA Toshio 27 · 79

村中歩 MURANAKA Ayumi 28 · 82

桃田有加里 MOMODA Yukari 29 · 85

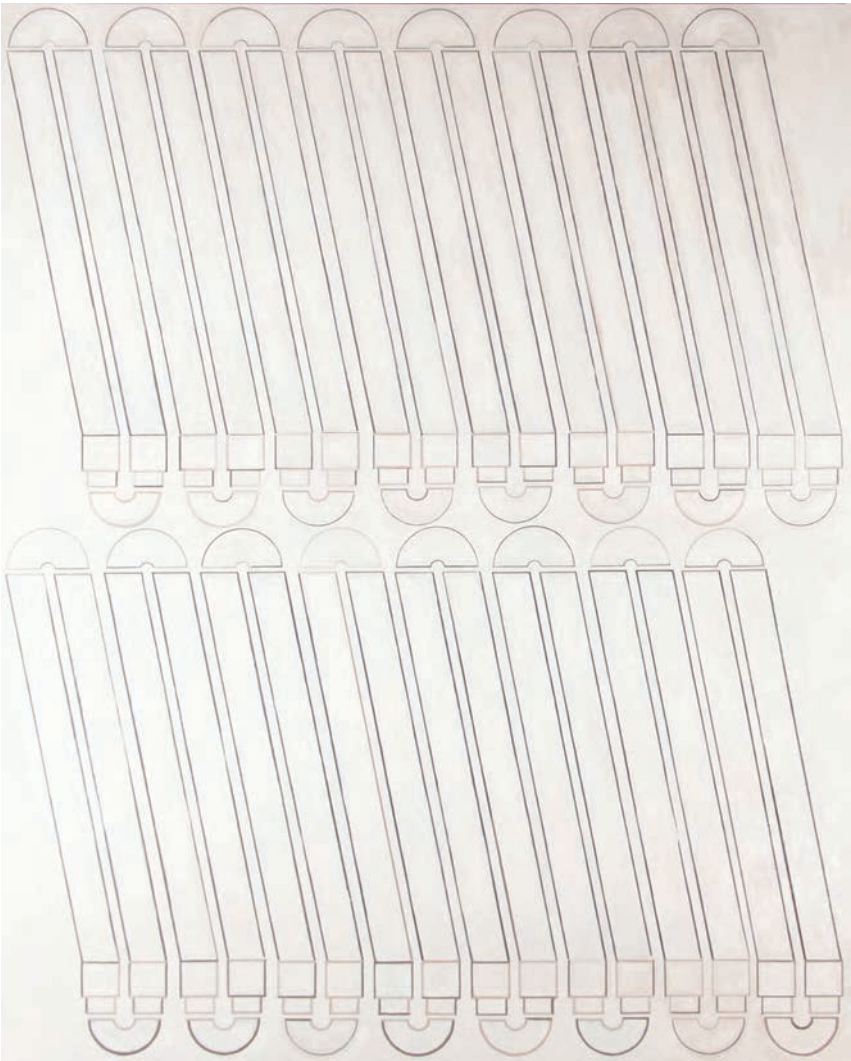
山田理恵 YAMADA Rie 30 · 88

吉田晋之介 YOSHIDA Shinnosuke 31 · 91

The Scholar Perspective 20

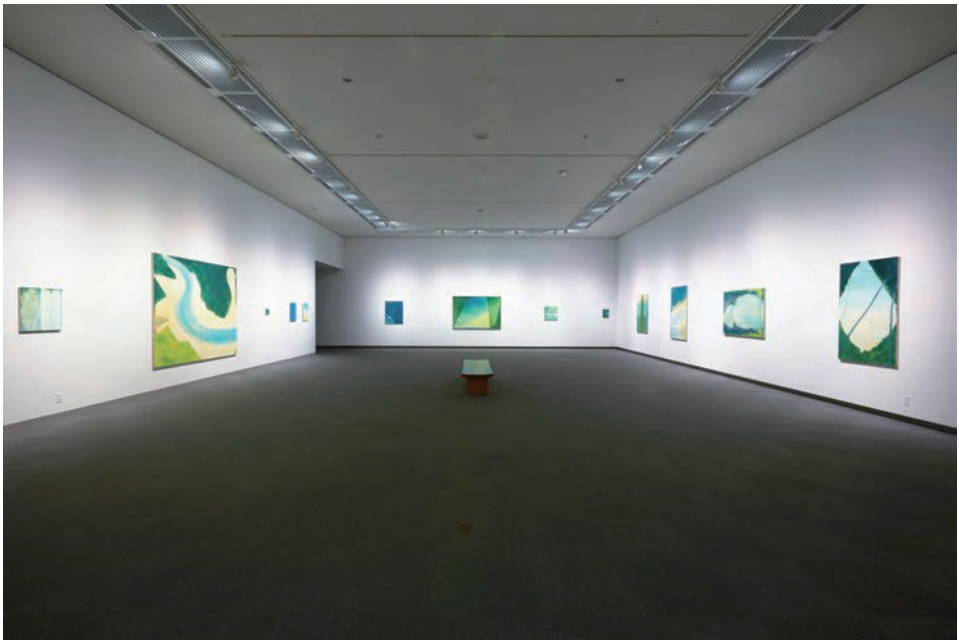
Works

第29回奨学者の作品



青山大輔

Record
油彩、キャンバス
227.3×181.8㎝
2016年



荒川朋子

「カミノ／クマノ ー聖なる場所へ」
展示風景　古道（画像正面の作品）
油彩、シェッソ、キャンバス
130.0×194.0㎝
2014年
photo by 後藤大次郎

井上光太郎

破線の時間、濁眠
油彩、キャンバス
162.0×130.0㎝
2015年

上野早智子

食卓
油彩、キャンバス
181.8×227.3㎝
2015年
photo by 椎木静寧

榎倉冴香

Flower on gold
油彩、アクリル、キャンバス
51.5×36.4㎝
2015年
photo by 椎木静寧

川崎愛子

常緑樹
岩絵具、水彩、吸収性下地材、綿布
72.0×91.0×3.0㎝
2016年
photo by (有)MGM

ごとうなみ

monos#7
油彩、白亜地、板
35.0×27.0×3.0㎝
2015年
photo by 松本直樹

島村篤子

集団団栗
油彩、シナベニヤ
91.5×182.5㎝
2015年

高柳麻美子

heavenly view
油彩、キャンバス
116.7×116.7㎝
2015年

津川奈菜

mob scene <1>
油彩、キャンバス
162.0×162.0㎝
2015年

内藤亜澄

展示される時間たち

油彩、エアロゾル、キャンバス

130.3×194.0㎝

2015年

西村一成

日本武尊
パステル、アクリル絵具、キャンバス
116.7×116.7㎝
2015年

野島良太

男と女８４

油彩、キャンバス

91.0×72.7㎝

2015年

藤本絢子

日暮
油彩、キャンバス
80.0×100.0×3.0㎝
2015年

益子未知

赤い景色

油彩、キャンバス

227.3×363.6㎝

2015年

宮岡俊夫

Landscape-pool-
油彩、キャンバス
130.0×163.0㎝
2015年

村中　歩

無題

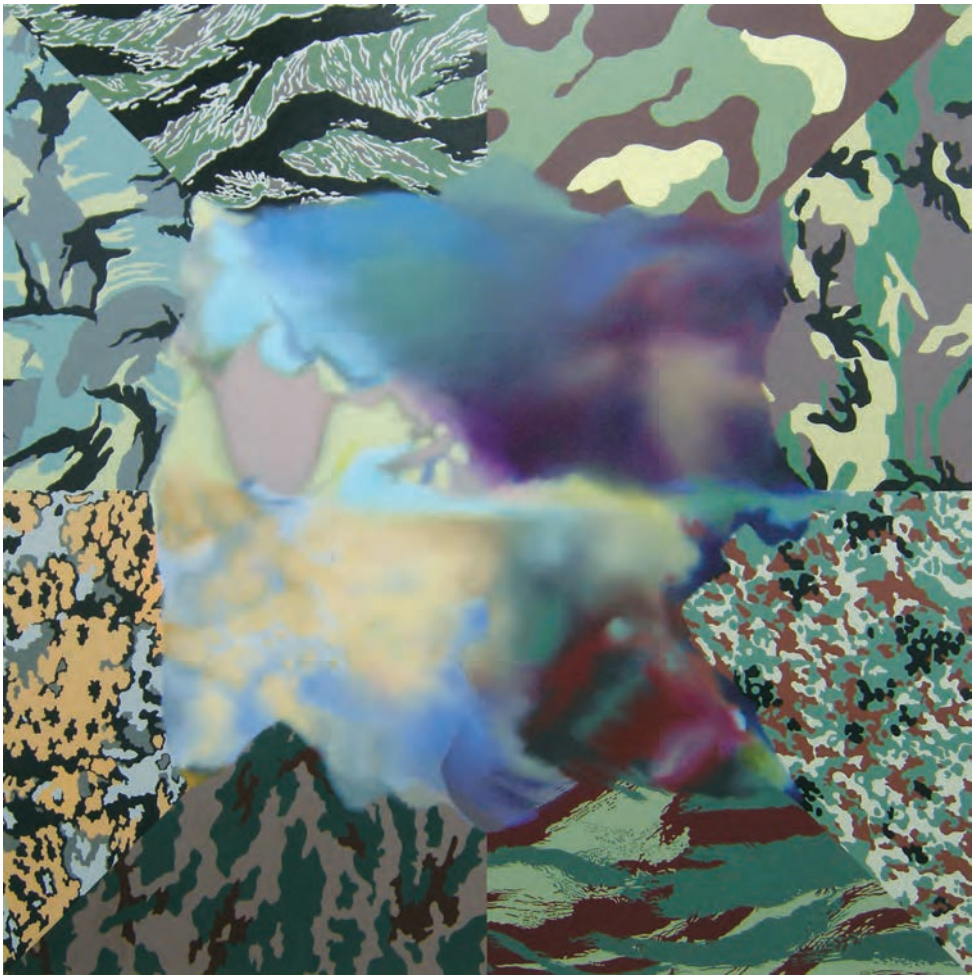
パステル、アクリル絵具、キャンバス

72.7×91.0㎝

2015年

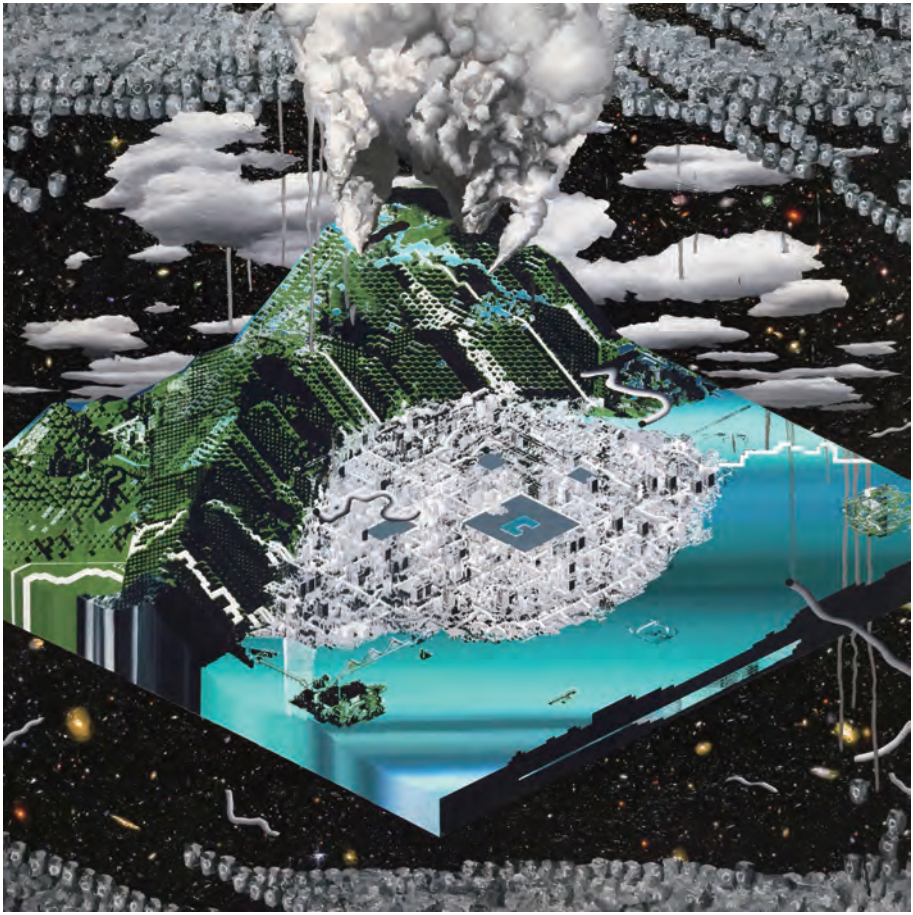
桃田有加里

「TIME SLICE」より
油彩、アクリル絵具、カーボン、
綿布、白亜地、キャンバス、パネル 等
各18.0×各18.0㎝
2014年



山田理恵

Camouflage series Ⅰ
油彩、アクリル絵具、キャンバス
194.0×194.0㎝
2016年



吉田晋之介

マザーボード
油彩、アクリル絵具、キャンバス
116.7×116.7㎝
2015年

The Scholar Perspective 20

Report

第29回奨学者のレポート

青山大輔

AOYAMA Daisuke

忘却のために

私はつねに静けさを望んでいる。まず、画家は（いや、画家に限らずなのだが）一人ひとりが自分で考えて行動しなければならない。画家はひと独りの体験、孤独を契機に開始しなければならない。つねに始まりというものを意識せざるを得ない。

忘却が望まれる。静けさとは忘却のことでもあるのだから。思い立ったらまずメモを取る。スケッチを描く。メモやスケッチはその事柄を忘れないために書かれるのだが、同時に、自分がその事柄に縛られないように、忘れるために書く。家は外の喧騒や天候や道行く他人から私を遮る。周囲の壁や屋根は外界を忘れるために建てられる。だが、外の喧騒は私のテリトリーに浸透し私を苛立たせる。仕方がないので音楽をかけて制作をする。浸透してきた騒音はなんとか音楽でごまかせる。

絵に描きつけられたイメージがもつ、意識的で能動的な性質は、そのイメージがすすんで私たちに働きかけることにより、私たちの目から何かを遮蔽する。画面にどれほど透過性としての奥行きや空間を表現していたとしても、あるいは対象の不在を表現していたとしても、奥行きや不在は絵のなかでイメージであり、やはり私たちから何かを遮蔽する。どのようなイメージであれ発生すると同時に遮蔽性がある。イメージは遮蔽性によって裏側を切断している。このイメージの可視による不可視は忘却のためにある。絵描きはこの盲目を必要とする。それに呼応するように、絵画も盲目を必要とする。

描き手である私たちに求められているものは、現実の対象であれ、抽象的なものであれ、なにかつねに心に想い描いていたものから逸れてゆき、横滑りしてゆくもの。その横滑りによって対象化が困難な何かであるとはいえないだろうか。フランツ・カフカの『城』は、そうしたことを端的に示している。測量士という本来の目的から大きく逸脱し、その逸脱・遅延こそが物語を構成しているように。

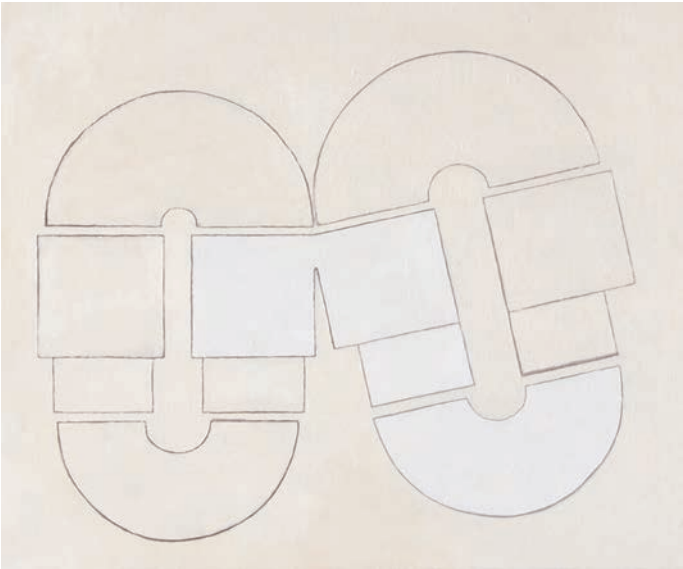
そもそも絵画にとって本来の目的とはなんだろうか。絵画の本性を見たことのある人がいただろうか。もし誰かが「絵画とはなにか」という問いを投げかけたなら、即座にその問いを発する主体の拠って立つ場所こそが問われなければならない。問いは体験を毀損する。その問いは、絵画の外から発せられている。

素材による躓き

アトリエで作業に熱中していて、ふと机を見るとそこに先ほど淹れたコーヒーが飲みかけのまま置いてあるのに気付く。あらためて飲む。忘れられていた飲みかけのコーヒーの味わいは格別だが、幸福というものはコーヒーを忘れる作業への没入、そして次にコーヒーを忘却していたことに気付いた瞬

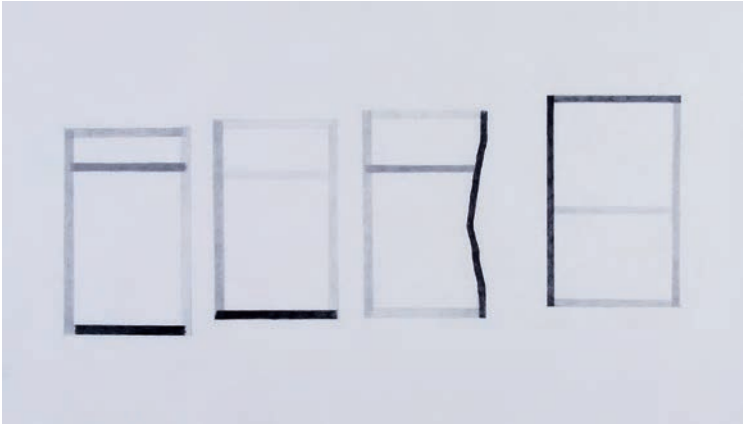
間のほうだろう。幸福（忘却）と幸福の認識（忘却の認識）は別のものだ。しかし、じつは私にとって制作に没入するということは非常に稀である。なぜなら、たしかにイメージは私にとってつねに供給者であるが、素材はいつもイメージの実現に対する躓きだからである。イメージは素材による躓きを無視している。私はコーヒーを忘れるほど制作に没頭していたが、制作のさなかでは常に素材が私を躓かせる。そこでは不安と戸惑いしかなく、不安と戸惑いは私のなかにとどまる。私は吃る。内在化され洗練された流暢な手つきなど、おそらく微塵もない。

　だからもし私が誰かに、うっかり（画家にいつも付きまとう既成のイメージとしての）没入感など語ってしまったら、後々苦々しく想い出してひどく後悔するだろう。私は素材と戯れ親密に連帯することをいとも容易に成し遂げる存在ではない。素材というものがどれほど自分を躓かせ挫けさせるものかを知っており、その意味で素材による不安と戸惑いを直感している。イメージと素材との折り合いのつかなさは作品のディテールに保持される。



２つのリングと白のコンポジション
油彩、キャンバス
38.2×45.6㎝
2016年

pieces
鉛筆、紙
36.4×51.5㎝
2014年



青山大輔

1974年　東京都生まれ

2001年　東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻修士課程修了

個展
2016年　ART TRACE GALLERY／東京（両国）にて10月28日～11月22日迄開催予定
2014年　Works on Paper　ART TRACE GALLERY／東京
2012年　小品　ART TRACE GALLERY／東京
2011年　Object　藍画廊／東京
2009年　Screen　秋山画廊／東京

グループ展他
2016年　絵を見る人　大川祐・青山大輔・高木秀典　HAGISO／東京（谷中）にて8月30日～9月19日迄開催予定
2015年　ART TRACE GALLERY 2015 GROUP SHOWS Vol.2　形象への眼差し、光景の眺め　ART TRACE GALLERY／東京
One Corner and Space　ギャラリー白線／東京
第10回大黒屋現代アート公募展　板室温泉大黒屋／栃木
2014年　杉並区役所本庁舎区民ギャラリー／東京
2013年　GROUP SHOW 2013　ART TRACE GALLERY／東京
Invisible-Division Of Labor　ART TRACE GALLERY／東京

http://daisukeaoyama.tumblr.com/

荒川朋子

ARAKAWA Tomoko

風景をほどく

拠り所にしている風景がある。大自然ではなく、日常生活の中、毎日見ているもの、テレビやパソコンの中で映し出される風景。車を走らせながら交互に見る、カーナビの画面と実の風景。

自分とつながっていく身の回りの風景は、生活の中で繰り返し通り過ぎ、場所や時間、季節に分類されることなく、日々刻々と頭の中に積み重なってゆく。

キャンバスに絵の具をつけ、縦に横に斜めに線を引いたり、キャンバスを回して見方に変化を与えたり、溶き油で絵の具を薄く溶いて流し、今描いたばかりの形を壊したり、そんな風にキャンバスと自分に刺激を与えていき、記憶の深いところから形と色を引き出して、繰り返し繰り返し当てはめて絵を探していく。パズルのように合致すれば、それで1つの絵は終わり、また新しいキャンバスに絵の具をつけていく。描かれたものは何処だか分からなくてもよく、意味も季節感も無くてよい。人物でも、植物でも、建築物でも何を描いてもよい。

「絵になる風景」は絵にならず、絵は実在の風景から全く異なる価値で存在している。絵で風景の再現をしても、この美しい世界にはとても敵わない。

絵のスタートは、どんなことに心を動かされたのか、何を描きたいのかを自分自身に問い続け、答え続けていくことの繰り返しで、絵の具を使ってその答えのようなものを炙り出していくことから始まる。描き進むにつれキャンバスに形を生み出し、絵の具で埋めていくために何かしらのきっかけが必要になる。現在、あるいはかつて見たであろう風景の形や色、質感の中でその組み合わせを試す。組み合わせは無限にあるにも拘らず、なかなか見つからない。実在の風景にあるもののほとんど全てを省いていったところで、絵のヒントに出会うことが多いように思う。1枚の絵を描き終えても、次の絵を描き始めると、また振り出しに戻って自問自答から始めなくてはならない。

透明、不透明、暗い、明るい、鮮やか、鈍い、どっち付かずの彩度、明度、持てる限りの経験を使って、絵を成り立たせる組み合わせを探す。もう打つ手がなく、行き詰まったと思い絵具を拭き取っていくと、今まで暗く沈んでいた絵が一瞬で立ち上がったりする。どうしても見つからなかったパズルのピースは、足下の風景や、目の前の絵の空間に埋もれてることが多い。

絵の具の質は体質に依るところが大きく、同じような表層になる危険を避けるため自分を否定しながら描き進んでいく。どの絵も偶然の産物なのではないかと思う。美しい絵の具の発色に助けられ、下地材の厚みの上でに希薄に感じられる塗りは救われている。

これからも積み重なっていく風景をほどきながら「何か」を探してさまよい描き、自分の見たい絵

を立ち上げていこうと思う。

手触り

指ではなく、絵具をつけた筆が支持体に触れているが、手触りというか、肌触りというか、身体がマチエールとも言い難いほどの薄い皮膜を感じ取りながら描いていく。

モチーフのまとう絵の具が「ざらざら、ぴた、さら、ざわざわ、しっとり、しゅしゅしゅっ」と手触りとなって伝わってくる。その手触りは、水に触れたり土に触れたりするのと同じくらいの実感を伴っている。だからキャンバス上の絵の具は、物質なのに予感を与えるのだと思う。

筆を介して感じる手触りは、絵の内奥に潜むテーマを引き出し、多くの時に、描いている絵が向かう方向への歩みを手助けをしてくれる。

夕暮れ
油彩、白亜地、キャンバス
61.0×73.0㎝
2015年

The ebb
油彩、ジェッソ、キャンバス
73.0×61.0㎝
2012年

荒川朋子

1975年　三重県出身

2009年　名古屋造形大学大学院修士課程造形芸術研究科造形芸術専攻修了

個展
2015年　-みはるかすそら-　ギャラリー芽楽／愛知
2014年　-カゼオトナミマ-　ギャラリーValeur／愛知
2013年　-たなびくひかり-　ギャラリー芽楽／愛知
2012年　-ソラヒカリナギ-　ギャラリーValeur／愛知
2011年　-ながれるさきで-　ギャラリー芽楽／愛知
2010年　はるひ絵画トリエンナーレアーティストシリーズ63荒川朋子展 確かめるための青眼を　清須市はるひ美術館／愛知

グループ展他
2015年　collection/selection:06　ギャラリーキャプション／岐阜
美濃加茂Annual2015　みのかも文化の森／岐阜（'14 '13 '12 '11 '10）
LUFT opening exhibition　LUFTルフト／愛知
2014年　世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」登録10周年記念 カミノ／クマノ一聖なる場所へ　三重県立美術館／三重
2012年　460人展　名古屋市民ギャラリー矢田／愛知
きそがわ日和　コクウ珈琲／岐阜
2011年　あいちトリエンナーレサポーターズクラブイベント One Day Café #32F「上の空」展 "Space One"　万勝S館／愛知
ALA Project 6「密度Ⅱ」　アートラボあいち／愛知
2009年　第6回はるひ絵画トリエンナーレ奨励賞

井上光太郎

INOUE Koutaro

ステートメント

私にとって〝夢〟とは不自由な、そして理解し難く、次の瞬間何が起こってもおかしくないような世界である。現実には、それを想起させる場面や光景に瞬間的に出会すことがある。まるで暗闇の中でパッとスポットライトが照らされるように。それらの場面や光景は何も語らないし、感情さえも見出だせない。ただ私自身が受動的に出会されるのである。私はそれらを絵画という手法で表している。

素材 - プルシャンブルー -

私の絵画において欠かせない色がある。「プルシャンブルー」だ。この色は単色で薄く延ばせば美しく鮮やかな青色が画面に映えるが、他の色と混ぜると一変して濁ってしまうのである。歴史上においてもこの「プルシャンブルー」は危険な色だと聞いたことがあるし、学生時代にもなるべく使うなと教わった。しかし、私の絵画にはほぼ全面にこの「プルシャンブルー」が練り込まれている。混色をして出来た濁りは影や光に鈍く調和していく。そして混色の組み合わせによっては単色の黒色よりも黒くなり、私の絵画に深淵の闇を作りだす。油絵の具が持つ独自の〝深み〟という感覚的なものを信じている。

表現 - 意味の不在、不可解な現象、他者としての私 -

現実の世界における意味の不在。私の描く作品にストーリーは無い。ただ〝光景〟である。その前後は不確かで、しかし現象は進行形で目の前に提示される。次の瞬間に何かが起こる可能性、もしくは何も起こらない可能性を常に感じることが重要である。創作の物語とは、あらゆる事象が関連し合い、接合し、意味の組み合わせで構成されるが、本当の現実というのは偶発的な重なりによって配置される。偶発的、これこそが現実の世界におけるあらゆる事象への可能性、展開への要素である。

不可解な現象が起こりうる可能性について非常に興味がある。場面に取り巻く予兆、雰囲気、不穏さ、焦燥感を絵画表現で捉えたい。これらの要素は私の心をざわつかせ、無視することのできない存在になっていく。不可解な現象は言語化するには難く、暗闇を歩くようにその感覚や要素を手探りで取り出す。そういう試行の中で、文学や映画、そしてこういった不可解さを表現に秘めた先人たちの絵画は、現代に生きる私にヒントを与えてくれ、再考させる。

私は私の絵の前では当事者ではなく他者である。「作品は作家の投影」という言葉はどんな表現方法においてもそう思える。しかし私の作品は私であると同時に他者でもある。私自身はその場において幽霊のように不在を有する存在である。関わろうとしても薄い膜のような壁が私と絵画を乖離し、それぞれは対面するように違う場所に立つ。瞬間、私は鑑賞者の立場

に陥る。私は私の絵に対して受動的な視点で眺めることしかできないのである。

TRACK
油彩、キャンバス
65.2×53.0㎝
2015年

失眠白
油彩、キャンバス
65.2×65.2㎝
2014年

井上光太郎

1982年　鳥取県生まれ

2005年　大阪芸術大学付属大阪美術専門学校芸術研究科絵画コース卒業

個展
2015年　ショートアラベスク　KOKI ARTS／東京
2013年　暗沌光幽　GALLERY MoMo Ryogoku／東京
2010年　エンドロール・ガーデン　SANAGI FINE ARTS／東京
2008年　サンデーモーニング、湿った夢の続き　新宿眼科画廊／東京
影の時間、浮き出た雨模様　ギャラリーはたなか／大阪
2007年　白い時間、夢うつつ　ギャラリイK／東京
彼らは今日も影夢の続きを見ている　ギャルリー・ウー／大阪
2005年　皆が寝静まった頃、パーティーは開演する　ギャラリー白3／大阪
2003年　井上光太郎展　不二画廊／大阪

グループ展他
2015年　Young Art Taipei 2015　シェラトングランデホテル台北／台北 [台湾]
3331年　Art Fair -Various Collectors' Prizes-　3331 ARTS CHIYODA／東京
2014年　隣景　アトリエキリギリス／神奈川
湿地　22:00画廊／東京
損保ジャパン美術賞展 FACE2014　審査員特別賞　損保ジャパン東郷青児美術館／東京
2013年　夜水鏡みがかず見るよ -死と詩 -　Gallery OUT of PLACE／東京、奈良
Winter Show　KOKI ARTS／東京
2012年　EMERGING DIRECTORS' ART FAIR『ULTRA005』　スパイラルガーデン／東京
「心霊写真」展　22:00画廊／東京
トーキョーワンダーウォール公募 入選作品展　東京都現代美術館／東京
The Catcher in the dark　TOKIO OUT of PLACE／東京
2011年　TOKYO FRONTLINE　3331Arts Chiyoda／東京
2010年　シブヤスタイル vol.4　西武渋谷／東京
artist book 展　アトリエキリギリス／神奈川
プリュス -トウキョウ・コンテンポラリーアートフェア　東美アートフォーラム／東京
ART & PHOTO BOOK EXHIBITION 2010　新宿眼科画廊／東京
TAISTING ART EXHIBITION 01　阪急百貨店メンズ館／大阪

http://www.koutaroinoue.com

上野早智子

UENO Sachiko

制作の初動について

鏡や道端に広がる水たまりを見ると不思議な感覚になる。そこには確かに、いま自分が立っているこの世界とは違う世界が目の前に広がっているように見える。しかし現実にはその世界が存在しているとは思えず、（頭が混乱しているのか）手で触れて確かめたくなる衝動にかられ、思わず触れてみる。

鏡に手で触れると、冷たい滑面のつやっとした感触と共にこれはただの一面であるという事実を突き付けられ、目の前に見えているはずの世界から、確固たる拒絶を受ける。そして同時に、一体自分はいま何に触れているのだろうという奇妙な錯乱が頭の中で起こる。

水たまりに触ると、そこにあったはずの奥へと続く世界は、たちまち歪んでどこかへ消え、しばらくするとまた元に戻ったようになる。

私が絵を描く時、この時抱いた奇妙な感覚を思い起こしながら絵の中で再構築しようとしている気がしてならない。

写真を絵の素材として頻繁に使用するが、そこに映っている物を描くというよりも、その一面に映し出された図像を鏡の面を手で触れているときと同じような（重層を帯びた）感覚で画面に絵具をのせている、と表現するのが適当と思える。

制作について

描き始めは、絵具を一気にのせることが多い。絵に必要だと思う絵具を大量に作り、必要と思う場所にのせていく。〝絵具〟という物質がどのような状態で画面に定着しているのか、画面には今どのようなことが起こっているのかということを、一手一手加える度に感じている。

そして、絵具をぬぐったり、削ったりして絵を壊しまた描き加えていくという事を繰り返し行い、完成へと近づけていく。

これまでは自分の求める作品をつくるには油絵具が最適だと思い、多くの作品を油絵具で制作してきたが、最近ではこれまでとは違った新たな感覚も発見したいと思い、アクリル絵具やその他の物質を使った作品も並行して制作している。やりたいと思えることを進んで取り入れ、絶えず制作に励もうと考えている。

食物
油彩、キャンバス
130.0×162.0㎝
2015年
photo by 椎木静寧

昼
油彩、キャンバス
97.0×130.3㎝
2014年
photo by 椎木静寧

上野早智子

1986年　埼玉県生まれ

2011年　武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了

個展
2015年　ギャルリー東京ユマニテbis／東京

グループ展他
2014年　京あるき in 東京 2014　アートスペース羅針盤／東京
2008年　Exhibition 2008 ～学生作品プロジェクト～　理化学研究所横浜研究所／神奈川
Emerging Buds Debut 2008　exhibit Live & Moris gallery／東京
メークリヒカイト　ラディウムレントゲンヴェルケ／東京
2007年　via art 2007　シンワアートミュージアム／東京
Sachiko Ueno, Midori Namiki exhibition　川口アートギャラリーアトリア／埼玉

HP:http://sachiko-ueno.jimdo.com/

榎倉冴香

ENOKURA Saeka

「描くことの始まり」

無限にあるメディアの中から絵の具を使い、平面に絵を描くという表現方法を選択したことは、私にとってとても自然のことのようでした。私の生まれ育った環境には美術とか絵画とか、現代アートなどという言葉を知る前からそういったものが生活の中に存在していました。

特に物心つく前から見ていた祖父の油絵が私に強い影響を与えているように思います。その絵は私の父の幼い頃の姿を描いた物で、幼い父の胸には猫が抱かれていました。画面はイエローオーカーに染まり、父の表情は口を尖らせご機嫌ななめのような表情を浮かべています。

実物のその絵はもう20年以上見ていませんが、祖父の筆跡、絵の具のぬめりを含んだ照り、〝絵画〟として意識して見たことのなかったその絵が私の記憶にしっかりと刻み込まれているのです。私が生まれた時にはすでにいなかった祖父のその痕跡は、私の記憶となり、その記憶を反芻することによって、まるで会ったことのない祖父との共有の記憶のように感じます。私が絵を描き始めたきっかけは、そのような経験に基づいているように思います。

「素材と表現」

絵を描くといってもその表現方法は多種にあります。ドローイングを描くときの意識とペインティングを描くときの意識も違います。ドローイングは最もイメージの根元に近いもの。ペインティングはそれに強い物質感が伴いより複雑になっていきます。私はドローイングをよく描きます。最近は色鉛筆とインクをよく使います。色鉛筆によって紙の表層に置かれた色と瞬時に紙に染み込まれていくインクの線は、お互いを滋養にして目に見えないイメージまでもその姿を増幅させていきます。ペインティングでも一つの平面に異なるマチエールの素材を幾つか置いたりして、イメージや物質感の間に起きる絵画としての反応を探っています。画材以外の素材としてよく使う鏡は外部とのつながりの役目を果たしてくれます。鏡は見えない記憶と共に今を写してくれるので、作品と外部との繋がりが必要な時に必要な素材の一つです。

決まったモチーフはありませんが、大抵は自分になじみのある植物や人や、ふと目に止まった雑誌の切り抜きなどを好きな色で構成します。何を描くかよりも、それぞれの違った素材の感触や色、マチエールをどのように扱うかを意識しています。そのようにして目に見えないイメージが生まれたり、わからなさに翻弄されたり、新しい発見をしたりして、日々変化してゆく画面が次の私のテーマになってゆきます。

Untitled
油彩、鏡、アクリル、キャンバス
91.0×72.7㎝
2015年
photo by 椎木静寧

Birds - blue drawing
インク、色鉛筆、紙
21.0×14.8㎝
2014年

榎倉冴香

1982年　東京都生まれ

2005年　多摩美術大学美術学部絵画科卒業

個展
2014年　榎倉冴香展　高島屋ギャラリーNEXT／大阪
2013年　eyes and glasses　スプラウト・キュレーション／東京
あなたに会わなくなってから　H.P.FRANCE WINDOU GALLERY／東京
2010年　ピンク・アッシュトレイ　スプラウト・キュレーション／東京
2009年　庭と穴掘夫と女の子　スペース23℃／東京
2008年　Ballads　スペース23℃／東京
2005年　TAKAHE　スペース23℃／東京

グループ展他
2015年　NEW BALANCE　gallery CAPSULE／東京
わたしの穴 美術の穴　スペース23℃／東京
Innocence　Temple de gout／ナント［フランス］
2013年　SO MANY IMAGES　スプラウト・キュレーション／東京
2012年　SLASH/06 ex-place　旧児玉邸アトリエ／東京
2010年　グッドナイト・ミホカンノ　アキバタマビ／東京
一枚の絵の力　アイランド／千葉
わくわく JOBAN-KASHIWA プロジェクト　TASKA／千葉
2009年　Hello! MIHOKANNO　トーキョーワンダーサイト渋谷／東京
O コレクションによる空想美術館・第7 室　トーキョーワンダーサイト本郷／東京
2008年　MONTBLANC ヤング アーティスト ワールド パトロネージ　モンブラン／東京
Vrishaba through Mithuna　ヒロミヨシイ／東京
2007年　WOROM HOLE episode MIHOKANNO　マジカル・アートルーム／東京
2006年　INDEX#2 Life Style　ARTZOON／京都、トーキョーワンダーサイト本郷／東京

saekaenokura.com

川崎愛子

KAWASAKI Aiko

描くこと描けないこと

世の中の全ての事象を描くことはできない。始まりも終わりも分からないエンドレスな風景と過去の出来事の繰り返しのなかで幽霊のように人々は行き交う。風景を描くことは場所の持つ力を描くこと、場所と人々の関係を描くこと。しかしその初めから終わりまでの全てを描くことは出来ない。

描けないことが描かれたものの奥行きを選択し、画材の質による心理的な遠近を画面にもたらすことで、描けないもの見えないものに賛辞を贈りたい。自分を含めた鑑賞者にとってそれらを思い起こす魔法の鏡になるような画面を作りたい。

風景画の奥行き

私は風景画を描いている。風景画で表現される遠近は心理的な遠近であると思う。そのような遠近感を作るために色面や顔料の質感に注意して制作している。

日本画を学んで得たことの一つは、同じ色相でも色面の質感の違いが印象に大きく影響するということだ。

質感を決めるのは、顔料と展色剤であるが、とくにここ数年は展色剤について試行錯誤している。日本画の展色剤である膠は顔料の質をほぼ忠実に表現する。しかし用法を間違えると耐久性のない画面になり後悔することになる。膠は生生しく強い色面を作る無二の素材だが、未だに使いこなせていない。恥ずかしい限りである。

一方で、今回奨学生となったことでアラビアゴムを展色剤として心おきなく使ってみることにした。アラビアゴムと顔料を混ぜて水彩絵具を作ることはとても楽しい。顔料が光沢を持って練り合わさっていく様は美しい。チューブから出した水彩絵具とはまた違った質感を得ることが出来る。水彩絵具と膠を併用した異なる質感の混在した画面作りが現在の課題である。風景画の制作にあたっては野外スケッチに行く。携帯する画材は透明水彩絵具だ。

今年は透明水彩絵具と自作の絵具で、自分に適したパレットを作った。ホーロー引きのパレットに透明水彩絵具を出して置き自然に乾燥させると、水を垂らせばどこでも使える携帯用のパレットが出来あがる。

自然物と人々が入り混じる場所、古来より人を引き付ける場所へスケッチに行く。今年は新宿御苑と熊野古道を描きに行った。

新宿御苑は森と広い芝生のある大きな公園だ。輝くような芝生の上で人々が御座を広げて家族や恋人とご飯を食べたり日向ぼっこをしている。人生で最も美しい瞬間を過ごしている人達が同時に何組もそこに居る。奇跡。その背景には私や彼らより以前から在って、私たちの以後も存在するであろう森が控えている。去年の春もここで桜が咲いていた。遠い、私の知らない未来に過去に咲いている桜が脳裏をよぎる。

熊野は以前から訪れてみたい土地だった。水彩絵具一式を持ち、

山歩きの装備で夏の熊野山中を歩いた。山道で激しい雨に打たれた。視界は雨で閉ざされ雨音で何も聞こえない。何も考えず川のような道を一人で下った。遠い昔の人も通った道だ。里に着いて荷物を見ると、パレットの絵具は流れスケッチブックは水漬しで絵は消えていた。何故か体が森の精気で満たされたようで充実している自分がいた。

アトリエで風景画の制作に取り掛かる。

絵になる時、その風景は特定の場所と時間ではなくなる。熊野でも新宿御苑でもなく、熊野でもあり新宿御苑でもあるものになる。現在であり過去であり未来のいつかでもある風景になる。そうなるように願いながら制作する。スケッチそのものより、その行為によって感じたこと、そのための経験が絵の動機となって制作に関わってくる。画面の奥行きと画材表現と動機がむすびついたとき風景画が完成する。

カルデラ
岩絵具、水彩、麻紙
72.0×91.0×3.0㎝
2016年
photo by (有)MGM

水平線C
岩絵具、綿布
72.0×91.0×3.0㎝
2013年
photo by (有)MGM

川崎愛子

1974年　千葉県生まれ

2000年　武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻日本画コース修了

個展
2014年　巷房／東京（'12 '11 '09 '07 '05）
2013年　アートスペース88／東京
2001年　銀座Gアートギャラリー／東京

グループ展他
2015年　フィールドオブナウ展　銀座洋協ホール／東京
2014年　ＳＩＣＦ　表参道スパイラル／東京
月刊美術 美術新人賞デビュー展　フジ画廊／東京
選抜展　Azabujuban Gallery／東京
新春公募展　Azabujuban Gallery／東京
2008年　東京芸術センター記念公募展　東京芸術センター／東京
2003年　トーキョーワンダーウォール　東京都現代美術館／東京
2002年　白川郷芸術祭　五箇山合掌の里／岐阜

ごとうなみ

GOTO Nami

カサブランカ

始まりは、誰かからもらった大輪のカサブランカを自室に生けた数週間だった。母が昔使っていた足踏みミシンを台にして私はしれっと花瓶を置いた。自室の薄暗い部屋の中で、強烈な芳香を放ち突然ここに存在することになった違和感を大きく含みながらも、自身の輪郭をしっかりと浮き立たせてカサブランカは白く咲き誇った。その頃の私は毎日を研究所とバイトと自室の行き来で繰り返す、ひたすら絵の世界にのめり込んでいるような十代最後の年齢だった。

寝転がると見上げる位置に置いたカサブランカは、翌朝には私の日常に紛れ存在の違和感も気にならなくなった。それから私は数日おきに水を換え、特別感情を揺さぶられるでも無く花に触れた。カサブランカは意外と強かった。日中は誰もいない空気も動かないような部屋で、変らず女優のように自覚的に在った。それでももう、そろそろというタイミングで、花は終焉へ向う判りやすい姿を私に見せ始めた。真ん中に突出している雄しべが濡れたような艶めきを保ちながら芳香は華やかさが薄れ、一層深みの増した自らのエネルギー放出を残り香に託すようにみられた。以降私は水やりの頻度を減らし、水切りもせず、植物がゆっくりと枯れていく様を見守った。白く輝いていた花弁のフチに黄褐色のヨレがでてくる。暗がりにくっきりと残していた輪郭は、徐々に波状にうねってくる。生気が少しずつ減退すると雌しべが水分を無くし、花脈の筋が次第に露になる。花を支えていた茎もひとまわり細くなる。花びらに錆びたような斑点が増えるといよいよ花脈も凹凸を深くして、花全体の印象ががらりと変わった。香りが匂いになる。潤いは蒸発する。干からびた花弁は生活の振動に落ち、雌しべが落ち、雄しべの正気もなくなる。薄暗いこの部屋の趣と同じ気配になったと感じたころ、いよいよ棒になったカサブランカを私は棄てた。美しかった。花は枯れるまで眺めていようと思った。

このカサブランカの時間は、もののの自在の美しさと、現象をそのまま見届けるというふたつの魅力を私に同時に放った。自分の感情を投影するのではなく、身体のなすべくまま在り、同時に現れる姿象を見つめていくというアンフォルメルを孕む私の絵画制作の指針が、この時うっすらと形成され始めたのかもしれない。だから油筆を手に取る時は私の中にカサブランカを感じた時にしている。どうなっていくのかわからない。予測ができない。まっさらな画面を前にしていつも「私はこれから何を描くのだろう」と思う。それでも私はそれを赦してきた。完成までの過程は常に変容し、カサブランカが枯れるまで終わらない。

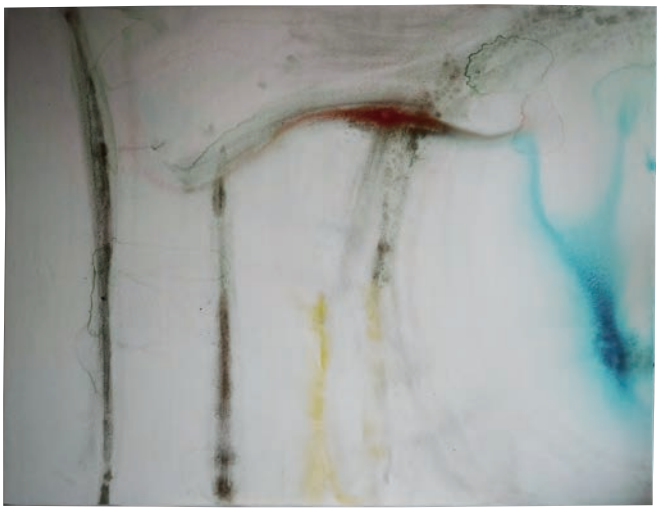
素材　そもそも

私は赤ん坊のころ粉ミルクを飲んでいたし、小学校から帰宅した後の飲み物といえばミロだった。出前一丁もそういえばよく食べて

いたし食卓にはいつも味の素が置いてあった。添加物が悪者でない時代に私は沢山のケミカルを摂ってきた。20代最初の頃インドへ行くきっかけがあり、何の知識もなくぽーんと飛行機で飛び、6ヶ月の現地での生活で私の舌は変わった。炭や牛糞でできた燃料で火を焚き、胡椒やスパイスは石で摺り潰し自然塩で調味する。当時住んでいた町や村のスパイス屋には殆ど化学調味料が売られていなかったので、刺激の少ない素材元来の味に慣れていった。以来日本に帰って来てからも何となくそういう志向が働き、煮干しや削り節で出汁をとるなど化学調味料をあまり使わない食生活になった。冷凍食品はアイス以外買った記憶が無く電子レンジも持っていない。でもだからと言ってとりたてて声を大にするようなこだわりはないのだ。絵画においてもこの後天的な性癖によって、できるだけ自然から成るものを使用したいと思っている。今回のスカラシップでは油絵の具を中心に兎膠やムードンなど下地素材を繰り返し注文した。絵画の素材は料理に似ている。上手く出汁がとれなくて何回失敗しようがだしの素には手が伸びないように、生キャンに前膠を失敗して途方に暮れても、そのうちいい下地をつくれるようになるだろうと楽感している。

偉大な先人たちの残したように油絵は仕方を間違わなければ何百年も持つものだし、透明で深い発色は美しい。昔からある素を扱って元来に触れたい私には、こうした選択はちょうどいいのだろう。しばらくは油絵の具の堅牢さとまつわる技術の学びを重ねて、表現の材には「そもそも」を大切にした素材選びを今後も続けていきたいと思っている。

monos#3　yg
油彩、白亜地、キャンバス
81.0×172.0×5.0㎝
2015年



水の波いろ
水彩、インク、土佐麻紙
91.0×116.7×3.5㎝
2014年
photo by 町田哲也

ごとうなみ

1969年　鳥取県生まれ

1988年　日体桜華女子高等学校卒業

個展
2015年　TOPOS／長野（‘14）
　　Blanc／長野
2011年　ギャラリー健／埼玉
2010年　D&DEPARTMENT PROJECT NAGANO by COTO／長野
2006年　十輪堂ギャラリー／長野
2003年　galerie cafe 夏至／長野
1999年　平安堂ギャラリー／長野

グループ展他
2015年　N-ART展　ガレリア表参道／長野（‘14）
2014年　Spring Selection　GALLERY ART POINT／銀座
　　渋響Ph:6　臨仙閣／渋温泉郷（‘13 ‘12 ‘11 ‘10）
　　5つの週末　三方舎／新潟
　　4人展　大島画廊／新潟
2013年　まつしろ現代美術フェスティバル　山寺常山邸／長野
　　Depression intersubjective Installation Meeting　花蔵・グレイスフル芸術館／長野市
2012年　The Motion Performance Art and Films　ヴィオパーク劇場／長野
　　NAGANO CONCEPUTUS　山ノ内町立志賀高原ロマン美術館／長野
2010年　境内アート×苗市選抜展　中島千波美術館別館／長野
2007年　New Fine Art Lab　ギャラリー82／長野
　　Art Potluck　元麻布ギャラリー佐久平／長野
2001年　立川国際芸術祭　立川市市民会館／東京

　　namigoto.com

島村篤子

SHIMAMURA Atsuko

理屈は抜きにして・・・

制作してゆく上で、大切にしているのは「作りたいという欲求に素直なる」「題材や素材を自由に選択する」事だ。自己模倣にならない様に心掛け、へたくそに制作してゆきたい。

素材と表現

自然現象、風景、動物、植物、身のまわりの物など、気になる物の形やイメージを組み合わせて作品化している。

まずは、クロッキー帳にいたずら描きのような気楽さで描き始める。その日に見た物、心に響いた事、体調、感情などが、色や形に自然と現れてしまう。単純そのものではあるが、仕方がない。私はこのような人なのだから・・・。理屈は抜きにして、手の動くまま、本能の趣くままに描く。「これらが自分の中に蓄積されていたのか」と、アウトプットしてみて再確認する。それらの緩慢なメモ描きには、自分でも気付いていない何かがあるような気がしてならない。

描きためられたメモを素に作品へ発展させてゆく事が多い。なるべく緩慢な雰囲気や、たどたどしさを残す様にしながら進めてゆく。その時点で、平面か立体か、支持体は何にするか、大きさ、ツヤの有り無し等が、割と自然に頭に浮かんでくる。

平面にするか、それとも立体、半立体かを決定する基準は感覚的なものに委ねている。題材のイメージで決定することもあれば、「最近、平面的なものばかり描いていたから、今度は立体的なものを作りたい。」という感じで決定することもある。この決定力は私の食欲に似ているのかもしれない。「昼食に肉（こってり）を食べたから、夕食は魚（さっぱり）」とか「チョコレート（甘い）、煎餅（しょっぱい）、クッキー（甘い）の順に食べる」など、味と歯ごたえの違うものを交互に摂取するのを好む質なのだ。

使用する画材は支持体との相性を考え、その時その時で題材のイメージを表現するのに適するものを選んでいる。

最近はシナベニヤを切り取った物に油彩が多い。きっかけは、昔使っていた自作の油絵用パレットの艶に魅せられ、その様な雰囲気を持った作品を制作してみたいと思い続けていた事にある。そのパレットとは、シナベニヤに、リンシードオイルを浸ませるように塗り込んで作ったシンプルな物だ。

筆洗いは嫌いなくせに、パレットの掃除だけは好きな私。混色するスペースを毎回ピカピカに磨いていた。使用する度に油が薄っすらとコーティングされ、いつしか、深い透明感を伴った木目の美しいパレットに成長していった。

そのパレットの雰囲気を持った作品を作りたいと思いつつも、ずっと先延ばしにしていたが、様々な偶然が重なり、制作する時期がやって来た。やりだしてみると、これがなかなか面白い。予想と違ってうまく行かず苦しんだりするが、

それを克服すると、思わぬ発見があったりする。

シナベニヤの木目や節目から、アイディアが引き出されたりして思わぬ利点もある。一枚として同じ木目は無いので、運命的出会いを感じる。

木目を生かすために、透明色の使用頻度が増えた。塗り重ねるうちに、やりすぎてしまう事もある。そんな時は拭き取ってから、更に消しゴムで消したりする。邪道だが、油が乾燥していない時は案外消えるのだ。木の中に染み込んだ色を落としたい時は、紙やすりも使う。消しゴムや紙やすりで描くような事もできる。これまで使う事の少なかった色の絵具を使用した事で、新たな表現につながったと思うし、今後の課題も見つかった。

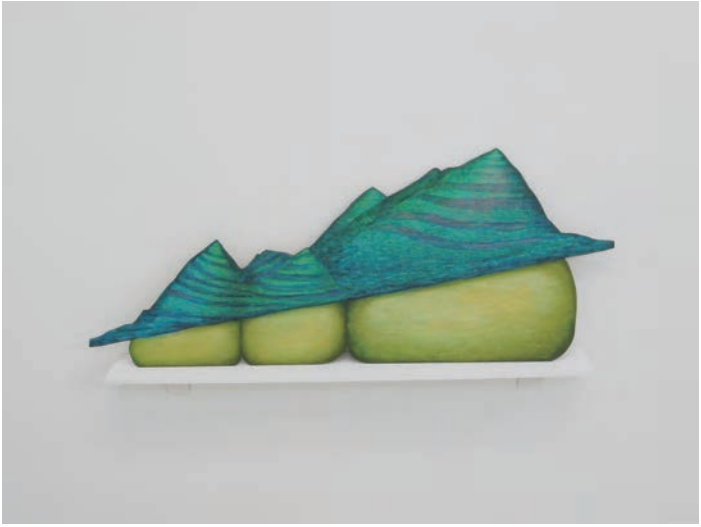
油絵具の乾燥具合によっては、予想外の混色が行われたりする。想定外の表現にたどり着く事があり、スリリングだ。

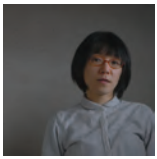
支持体にしても、画材にしても、使いこなしすぎずコントロールしきれないくらいの方が、懸命に取り込むことが出来て魅力的だ。自分の想像を超えた作品が出来るのは不思議だし嬉しい事だ。

パレットの深い艶をイメージして始めたシリーズだが、それだけに固執している訳ではない。マットに描く事もしばしばだ。艶のある作品と同時進行している。

この様な感じで割と気ままに制作している私だが、こんな事で良いのか不安になる事もある。たまに反省したり落ち込んだりしつつ、ふらふらと、「大人気ない制作の道」のド真ん中を歩いて行きたい。そして、言葉で表せない「何か」を醸し出す作品を作りたい。

鉱物のある、フレーム
油彩、シナベニヤ
88.0×69.0㎝
2015年





登る山
油彩、シナベニヤ
46.5×114.0㎝
2014年

島村篤子

1970年　東京都生まれ

1993年　日本大学芸術学部美術学科絵画コース卒業

個展
2015年　ギャラリー檜 plus／東京(‘11)
2014年　ギャラリー檜 C／東京
2013年　ギャラリー檜 B／東京
2009年　STICHING KAUS AUSTRALIS／ロッテルダム（オランダ）
2004年　Sphere Gnossienne／東京(‘00)
1998年　Open Studio／東京(‘97 ‘96)
1995年　ギャラリー21＋葉　Annex／東京

グループ展他
2015年　HINOKI ANNUAL 2010-11、 2012-13、 2013-14、 2014-15　ギャラリー檜 B・C・plus／東京(‘14 ‘13 ‘11)
2014年　GALLERY HINOKI ART FAIR　XIII・XIV・XV・XVI　ギャラリー檜B・C・plus／東京(‘13 ‘12 ‘11)
Drawing Show　ギャラリー檜B・C／東京
2012年　Interactive Youth　ギャラリー檜B・C／東京(‘11)
2010年　Interactive V　ギャラリー檜B・C／東京
マド ト トビラ（2人展）　Gallery 銀座1丁目／東京
2009年　嚶嚶の会　埼玉近代美術館一般展示室／埼玉、ギャラリー横浜／神奈川、ぎゃらりー彩光／神奈川(‘08 ‘07 ‘06 ‘05 ‘04)
2004年　自慢・満足-IX「誰でもピカソ？とんでもない！Part-5」　ギャラリー21+葉／東京
2003年　自慢・満足-VIII「まだまだ誰でもピカソ？とんでもない！」　ギャラリー21+葉／東京
2001年　ゆめひと展　アトリエ夢人館／東京
時時重重（ダンス・音楽・美術のコラボレーション）　SPACE EDGE／東京
第2回国際アーティスト・ブック・トリエンナーレ　コンテンポラリーアートセンター／ヴィリニュス(リトアニア)、ギャラリー5020／ザルツブルク(オーストリア)（‘00)
自慢・満足-VII「続「誰でもピカソ？とんでもない！」　ギャラリー21+葉／東京
2000年　自慢・満足―V「再び、「美術を楽しむ」ために」　ギャラリー21+葉／東京
1999年　表現のゆくえ　ギャラリーイセヨシ／東京
八千代展（2人展）　八千代マンション／東京
自慢・満足―Ⅳ「誰でもピカソ？とんでもない！」　ギャラリー21+葉／東京
1998年　第3回アート公募企画作家選出作品展　SOKOギャラリー／東京

高柳麻美子

TAKAYANAGI Mamiko

“HOME”

私の作品テーマは「繋いだ風景」である。地元京都から東京、そしてドイツ留学を含めレジデンスプログラムなど、様々な国や町で制作活動を行ってきた。そして私はその町の中にある一瞬一瞬変わりゆく風景の中で生きてきた人達や文化に触れ、そこから感じた自分の感情を色や形で表現してきた。日本から離れて私はどこへ行くのか、私が居る場所はどこなのか、不安や孤独の中にある今居る幸せを移り変わる季節に変えて色や形で表現し続けてきた。個展のタイトルにも使用した「幸せな孤独」の中、異国で制作をしていた。２０１４年に京都を再び拠点として活動を再開して以来、慣れ親しんだ国に戻り、「幸せな孤独」を感じながら海外で制作をしてきたのとは逆に言葉や文化も分かり合える「群衆」の中に戻ったのだが、それが私にとって「居る場所」なのか。「群衆の中での孤独」で日々制作している時に、見たまま感じたまま色をのせるスタイルから過去にいた場所を思い出す過程として削るという作業を組み立てた。削るだけではなく、そこからまた色を付け加えることにより、キャンバス上での過去と現在の空間の融合、つまり私が居る、ワタシが居た場所を「削る」という行為により過去への接点を創り出し、そして削ったところをまた色や形を加えることで現時点からその過去に居た場所への空間を繋げて行くのである。

「社会の中に存在する自分」を考え、自分について対峙し、作品について対話する。

私はどこに居ても、どのような環境であっても制作は続けていく。今居る場所が私にとってのHOMEであり、また次のHOMEを探して過去と現在、そして未来を繋げていくために色を重ねていくのだ。

“colorful space”

作品は一貫して油絵を使用している。油絵の重厚感が私の表現したい色を生み出しやすいからである。過去にその土地で感じた自分の感情を思い出し、まず十層以上様々な油絵を塗り重ね、そこから形を削りだし、偶然を伴って出てきた色を形づけ、またそこから新たな色を足して融合させていく。油絵での作業は乾燥に時間がかかるが、削る作業の際、油絵独特の半乾きの混ざり合った色、また反対にしっかりと乾いて削るたび目立つ色。薄く重ねたり、厚く塗り重ねたりと、表現方法が多様である。今回スカラシップを通して、使ったことのない色やオイル、新しく開発された色を使用することができた。長年油絵には親しんできたのだが、表現方法には毎回新鮮な驚きと発見があった。色と形のみで表現する私にとって、色を創り出すことは重要なことである。自分の感覚を信じ、研ぎ澄まし、自分で納得する色を作り、キャンバスにのせる。無限にある色の世界はまだまだ私に驚きと魅了をもたらしていくであろう。

installation view　個展”short stories”より
油彩、パネル
夏の気配 53.0×53.0cm、舞う桜 直径30.0cm
2015年

shooting star
油彩、キャンバス
160.0×130.0㎝
2009年
photo by Robert Pupeter

高柳麻美子

1976年　京都府生まれ

2003年　多摩美術大学大学院博士課程前期絵画専攻修了
2009年　ドイツ ミュンヘン美術院修了（Diploma）

個展
2016年　Hideharu Fukasaku Gallery／東京にて10月下旬開催予定
　　gallery耀／富山にて7月15日から開催予定
2015年　Short stories　Hideharu Fukasaku Gallery／東京
2014年　sol, luego la lluvila 雨のち晴れ　サンアイギャラリー／東京
2013年　smooth affections 柔らかな感情　サンアイギャラリー／東京
2011年　Happy Solitude　アルテフォグタイ／ビーレフェールド[ドイツ]
　　Mellow　ヴィラローゼンタール／イエナ[ドイツ]
2010年　Your Place, My Place　WINTER & WINTER ギャラリー／ミュンヘン[ドイツ]
　　Your place, My place　アイヘンミュラーハウス／レムゴ[ドイツ]

グループ展他
2016年　スペイン、ノハ市にてレジデンスプログラムグループ展開催予定
2015年　it’s all good! 二人展　ポルトリブレ／東京
2013年　ビルバオアルテ滞在奨学金　ビルバオ[スペイン]
　　PUERTAS ABIERTAS 2013　ビルバオアルテ／ビルバ[スペイン]
2012年　バルモラル滞在奨学金　バート・エムズ[ドイツ]
　　november remember September　バルモラル城／バード・エムズ
2011年　野村財団 助成金
　　How to paint, Zeniuk 教授と最優秀卒業生展　カトリックアカデミー／ミュンヘン[ドイツ]
2009年　E-ON AG バイエルン文化賞 音大美大部門 最優秀卒業生ドイツ
　　若手作家の為の滞在奨学金　レムゴ[ドイツ]
　　RING FREI ドイツ国内選出優秀卒業生による展覧会　ボン[ドイツ]
2008年　STIBETプログラム奨学金 DAAD　ミュンヘン[ドイツ]
2005年　visual Issues　トラウンシュタインギャラリー／トラウンシュタイン[ドイツ]
2004年　FRISH FARBE!　ボーデンゼーギャラリー／メーアスブルク[ドイツ]

www.mamiko-takayanagi.com

津川奈菜

TSUGAWA Nana

「もう一度、見る」

私は、気にかかる過去や現在の出来事の感覚を留めておくために、ドローイングを中心として、ペインティング、オブジェなどの制作を行っています。

大学生の頃、フィルムカメラを持ち、歩いて見えてきた風景を何枚も撮りました。面白いものを写したいと思い外を歩くと、世界が特別なものに見えました。その時、フィルムカメラという一回性のものを通し、目の前のものをファインダー越しに切り取ろうとすることで、見ているものへの感度が高まり、瞬間的に自分の表現に必要な要素は何かという判断ができました。そして、現像した写真を並べてみてみると、写らなかったもの、又は、必要以上に写りすぎたものがあるように感じました。それらをドローイングしたことが、現在の制作につながっています。

今現在は、制作中のプロセスで生じる筆致の跡などからイメージを拾う作業を通し、ドローイングを制作しています。オブジェの制作でも、指先が形を作ることを第一にして、形を決めていくという手段を取っています。ペインティングでは、ドローイングの手段を軸とし、絵具の層を重ね、消したり描いたりしていくことで制作を進めています。

私は、自分の視覚で捉え記憶する物は、何かしら特別で意味があると考えます。そして、制作の中でそれらがもう一度、自分が作ったものを通して立ち現れ、気にかかる物事を認識します。それは、過去そして現在の感覚を作品に書き替えているということが言えると思います。それらを未来に留めていくことが私の目的です。

「素材と表現」

鉛筆のドローイングは、紙に鉛が付いたものであり、油絵は、油絵の具が画布にこすり付けられたものです。

表現は、内容だけに留まらず、まず物質の扱いがあります。絵である前に、物質であるという事の問題は絶えず現れます。

私の制作で重要なことは、沢山つくることです。私は本を三回以上読まなければ、その本の内容が頭に入って来ません。そのことは制作にも当てはまることで、繰り返し新しい画布でドローイングを描きます。それは、「キャンバスの種類」「絵の具」「筆の扱い方」この三つを挙げてもかなりの組み合わせがあり、その条件によって描かれるイメージが変動しています。「この本から読みたかった情報」のように「この媒体の組み合わせで描きたかった絵」を描きたいと思っています。

スカラシップでは、沢山の種類の油絵具を手にしたことで、私は今まで決まった数種類の色しか使っていなかった事に気がつきました。例えば、「赤」という色ひとつを取っても、顔料の種類によって様々な「赤」があります。画面に付けられた新しい色から、見えて来るものがまだ沢山あるように感じています。

反復　更新　忘却<4>
油彩、パネル
72.7×91.0㎝
2014年

ヤマハミテル
油彩、キャンバス
162.0×162.0㎝
2014年

津川奈菜

1991年　広島県生まれ

2015年　尾道市立大学大学院美術研究科油画コース修了

個展
2016年　境界にあるものたち　ギャラリー サイトウファインアーツ／神奈川
2013年　博士は実験中　Gallery Bar 夢喰／広島

グループ展他
2016年　ワンダーシード2016入選作品展　トーキョーワンダーサイト渋谷／東京
2015年　シェル美術賞展2015　国立新美術館／東京（'14）
シューリョーテン②　光明寺會舘／広島
トーキョーワンダーウォール公募2012 入選作品展　東京都現代美術館／東京

http://tsunana.tumblr.com

内藤亜澄

NAITO Azumi

作品をとりまく『内』と『外』

私たちの世代がどのように形容されるか定かではないが、少なくとも多種多様なメディアに溢れ云々といった現代では、自分たちを取り囲む実物、二次媒体、記憶のイメージに差異、優劣が希薄で、個々の存在は非常に脆弱な関係性の基に成り立っている。

作品と制作プロセスを図式化してみると、かつては「作品」と「実物」であったものが、より抽象性を増し、「作品」と「対象」、そしてフォーマリズム、モダニズムを経て作品はそれ自体の自立を図ってきた。しかし、キャンバス上に描くという時点でそれらは「外側」という概念に捕らわれ、その対概念として「内側」が生まれる。かつて「作品」と「対象」であった図式は「作品」と「自己」、つまり自身の内側という概念に変化してきた。加えてパーソナルな時空間が増加、拡大を続ける現在である。この自己埋没に陥りかねない状況の中で「外側」と「内側」のバランスをとりながら制作をしている。「内側」とは自己の記憶、及び実物や二次媒体をも包括する。メディアの発達した現代では他者が作品を鑑賞した時、そのイメージを通じて実物に結び付けることは難しく、制作した作者の「自己表現」、しいては「内面の吐露」であると捉えられる。つまり第三者から見れば、キャンバス上の表現は作者の「内側」、自らは「外側」なのである。

この「外側」と「内側」の関係図式を様々な領域に落とし込み、キャンバス上に表現している。現実と記憶、室内と屋外、表面と奥行き、ロウアートとハイアート、それらの領域を行き来しながら絵画という単一の方法で表現することで、イメージの素が商品広告だろうが私的な写真だろうが、まるで伝統絵画のように振る舞い、実物だろうが記憶の風景だろうが、それらは画面上のモアレを生じる。画面上で差異なく表現するのは、前述の通り、それらの優劣が希薄で脆弱な関係性のもとに成り立っているからであり、鑑賞者によって最終的に「内側」という概念に回収されるからに他ならない。

蓄積された自己の内面を見つめつつも、「外側」との距離を測り、自己陶酔や現実から隔絶された空間におちいることを拒否し、対話をしながら制作をしている。

素材と表現

素材には大きく分けて二つの領域が存在する。一つは「イメージを再現するためのツールとなるもの」、二つ目は「それ自体が主張した表現とするもの」。

私はどちらかというと素材の使用目的を前者に委ねてきた。しかし自分のコンセプトを見直し、多くの絵の具の使用が可能になると、素材の使い方によっても「内側」と「外側」（制作コンセプト参照）を表現することが可能ということに改めて気づかされた。鑑賞者の目線を画面の奥に向けさせつつも、素材の効果で反発させ、表面を意識させる。素材の使い方は様々だ

が、私はなるべくそれ自体を主張させたり、表現方法に幅をつくりコラージュのような違和感を生じさせることなく、あくまでもイメージに着眼点がいくようにしてきたつもりだが、視線の動きという点においてはあえて差異を生じさせる試みをしてみた。この変化が前述のようにコンセプトにも影響を与え、素材とコンセプトが相互間で共鳴しながら絵画が成立していることに改めて気づかされた。

置かれた時間
油彩、エアロゾル、キャンバス
145.5×145.5㎝
2015年

ホーリーマウンテン
油彩、キャンバス
97.0×130.3㎝
2014年

内藤亜澄

1983年　神奈川県生まれ

2006年　東海大学教養学部芸術学科美術学課程卒業

個展
2014年　ギャラリー椿・GT2／東京
2013年　ギャラリーアートポイント／東京

グループ展他
2015年　シェル美術賞アーティストセレクション2015　国立新美術館／東京
NEXT ART展　朝日新聞東京本社本館、松屋銀座／東京
アート台北2015　ギャラリー椿ブース／台北［台湾］
第10回タグボートアワード展　準グランプリ　ギャラリーF&F／台北［台湾］
SPRING FAIR　ギャラリー椿／東京（'14 '15）
2014年　FACE展 2014損保ジャパン美術賞展　損保ジャパン東郷青児美術館／東京
トーキョーワンダーウォール公募2014入選作品展　東京都現代美術館／東京
Story Time Girls 2014　ギャラリーQ／東京
アートショウ釜山　ギャラリー椿ブース／釜山［韓国］
ヤングアート台北2014　ギャラリー椿ブース／台北［台湾］（'13 '14）
2013年　Paintings, Objects and Photographs　ギャラリー椿／東京
2012年　第5回アーティクル賞入選者展覧会　ターナーギャラリー／東京
第22回ARTBOX大賞展準グランプリ　世界堂新宿本店／東京
シェル美術賞2012本江邦夫審査員賞　国立新美術館／東京
Reflections 2012　ギャラリーアートポイント／東京（'11 '12）
2011年　ACTアート大賞展優秀賞　The Artcomplex Center of Tokyo／東京
Prologue Ⅶ　ギャラリーアートポイント／東京
Trefle　Art complex Center of Tokyo／東京
2009年　世界絵画大賞展本江邦夫賞　世界堂新宿本店／東京
全日本アートサロン絵画大賞展文部科学大臣賞　国立新美術館／東京、大阪私立美術館／大阪
2008年　山本鼎版画大賞展入選　上田創造館／長野
まどかびあ版画ビエンナーレ展入選　大野城まどかびあ／福岡
日本版画協会展入選　東京都美術館／東京

http://azuminaito.mond.jp/

西村一成

NISHIMURA Issei

私と絵画

自分と絵画はまるで表裏一体の分ち難い強い絆で結ばれている。絵画が私を生きさせ、私がその絵画を創りあげる。私個人が常に苛まれている孤独感、死への恐怖、悶々としたエロス、幼年期の記憶、幸福な気持ち、家族や友人らに直接言葉で表明できない深い感謝の念、そして外界のすべてから受ける情動が、色彩と筆致によって現出する。それは心の底からマグマのように沸き立ってくるもので、自分でも意図できない感情の激烈なほとばしりだ。

一人一人の人間の小さな生にぴたりと寄り添って絵画が寄与してくれる力、その愛おしい価値を感じていただければと思う。絵画は画家の分身であると同時に、見る人たちの心を映す鏡にもなるだろう。

生きているぞ！

幼いころからいつでも何か描いていた。描くことは得意だったが、本格的に描き始めた二十歳の春、画材（素材）として思い浮かんだのは小中学時代に使ったような画用紙、水彩絵具、色鉛筆、油性ペンぐらいだった。その頃から自分の世界観を表現する唯一の場として絵画と向き合ってきた。日々湧き上がる思いやイメージをまるで日記を綴るように描いてきた。

油絵具を使った時期もあったが、アクリル絵具との出会いは私にとって革命的だった。水溶性でありながら乾くと耐水性で、油絵具より断然扱いやすく乾きが早い。何よりそれはありがたかった。私の場合、画材（素材）にも瞬発力が必要なのだ。自己の内面や外界から受ける感情の揺らぎを、画面に吐き出さなくてはいられない。乾燥を待ってはいられないのだ。ジェッソもアクリル素材で下地材としてはもちろんアクリル絵具と同様によく使ってきた。ジェッソの上にアクリル絵具で彩色する時、配色などのバランスを考えながらあえて下地を残す使い方で、また、透明色を重ねてジェッソを透かせて生かしたりして。ホルベイン社のカラージェッソは色数が豊富で21色すべてを大量にいただき、多作の私に大変ありがたいものだった。

このような私の創作には下書きも完成予想図もない。画面を前に、自己とあるいは絵との対話から描いていくのだが、即座に感情を画面に残せるアクリル絵具はもってこいだった。必然的に多作に拍車がかかり、爆発的に大作も描けるようになった。

アクリル絵具以外にも、ポスターカラー、ペンキ、墨、パステル、オイルバー、水彩絵具、インク、各種メディウムなど、また画材ではないものも使うが、素材からの自由な誘惑が創作意欲を爆発させることもある。

マチエールへのこだわりからメディウム類は度々使ってきた。ホルベイン社のモデリングペーストパミスが届いた頃に出来たひとつが「死の花」（F30号）という作品だが、重なった死別の悲しみに沈んだ日々、創作は祈りにも似て、パ

ミスで画面に創る花の一つひとつが私にとって献花のようだった。また、パステル、オイルバー、ダーマトグラフなどは即興的な画風には欠かせない絶好の出会いだった。私の作品に、アクリルや水彩の上に重ねた直感的線描は多い。色と線を同時に表現できる点が好都合なのだ。ホルベイン社の１００色ものアーチストオイルパスの木箱を開けば、まるで子供時代に帰ったようなワクワクする気持ちを抑えがたく感じる。

共感を得られるとは限らないが、描きたいと感じた瞬間を逃さず、色彩と筆致で表現する。言葉にはならない自己の内面を感情に揺さぶられながら。言い換えれば、素材からほとばしるのは「生きているぞ！」という表明でもある。私にとって「素材と表現」はそのための必需品のようだ。

ホルベイン社には心より感謝している。描かずにはいられない私にたくさんの画材を与えていただき、大変ありがとうございました。

死の花
アクリル絵具、キャンバス
91.0×72.7㎝
2015年

希望と絶望のオレンジ　東谷山に宿る妖精たち
インク、アクリル絵具、カラージェッソ、キャンバス
53.0×72.7㎝
2014年

西村一成

1978年　愛知県生まれ

1995年　愛知県立千種高等学校退学

個展

2016年　西村一成新作展　ISSEI AND THE DEVIL BLUES　十一月画廊／東京
　　西村一成新作展　ISSEI AND THE DEVIL BLUES　ギャルリー宮脇／京都
2015年　西村一成新作展　ISSEI AND THE DEVIL BLUES　ハートフィールドギャラリー／愛知
2014年　西村一成絵画展　幻たちのブルース　ギャルリー宮脇／京都
　　僕は絵筆持つ鬼でして　東桜会館ギャラリー／愛知
2013年　トーキョーワンダーウォール都庁2013　東京都庁第一本庁舎／東京
　　僕は翔ぶ！　東桜会館ギャラリー／愛知
2012年　目の中の目 西村一成個展　ギャルリー宮脇／京都
　　何ぼくは何　東桜会館ギャラリー／愛知
2011年　絵画＝内面の表皮 西村一成個展　ギャルリー宮脇／京都
　　僕の破片　東桜会館ギャラリー／愛知
2010年　ぼくの世界のそれから　東桜会館ギャラリー／愛知
　　西村一成アンコール展　～Dear Issei～　カーデンギャラリー・日進市立図書館／愛知
2008年　西村一成展「こころの色　心のかたち」の表現　タカヨシ・メキシコ美術館／愛知('09)

グループ展他

2016年　「あいちからの発信／発進ーあいちから世界ー」　名古屋市民ギャラリー矢田にて　10月4日～10日迄開催予定
2015年　ＦＡＣＥ展２０１５損保ジャパン日本興亜美術賞展　損保ジャパン日本興亜美術館／東京
2014年　第2回美術新人賞デビュー入選展　フジヰ画廊／東京
　　第2回宮本三郎記念デッサン大賞展　宮本三郎美術館、世田谷美術館／石川、東京('11)
2013年　トーキョーワンダーウォール公募2013入選作品展　東京都現代美術館／東京('09)
2012年　あいちトリエンナーレ展開事業アーツ・チャレンジ2012　愛知県芸術文化センター／愛知
2009年　名古屋発・現代美術展「Dアートフェスティバル2009」　ダイテック・サカエ／愛知
2008年　リキテックスビエンナーレ2008　青山スパイラルガーデン／東京
2007年　シェル美術賞2007　代官山ヒルサイドフォーラム／東京
　　第17回青木繁記念大賞公募展　石橋美術館、郡山市立美術館／福岡、福島
　　第5回池田満寿夫記念芸術賞展　銀座洋協ホール、大阪府立現代美術センター／東京、大阪
2006年　第91回二科美術展　上野の森美術館／東京

http://issei-nishimura.com/

野島良太

NOJIMA Ryota

「絵くんと絵さんが　絵しても絵はできない」

普段のいろいろな何かを無かったことにしないために絵を描いているところがある。そういったところから始まった絵は、描いているうちに考えていることが変わったり変わらなかったり、脚色されたり元が何で何をしたいのかわからなくなったり、また、どこかで見掛けたり感じたことを突拍子もなく思い出してそれが進行中の絵にすんなり馴染むこともあったり、途中突然絵の力のようなものに持っていかれ、その力にその時の自分が加担出来れば加担し、その流れに乗れないときはただ落ち込んだり、また、なんとなく染み付いたただの自分の癖をやりとりがちゃんとあったと勘違いしやりとりある風で終わらせてしまうような体力の無いものを描いてしまうこともある。いろんなことが入り混じったやりとりがあり、ある程度の時間を経ると良くも悪くも思い入れが生まれてしまうが、案外思い入れはそんなに自分にとっては重要ではなかったりする。

そういったことと向き合ううちに出来上がった自分の絵が自分で描いた気がしないときがある、そういったとき作品は個人的なものの様で個人的ではないものになるのではないだろうか。

「素材」

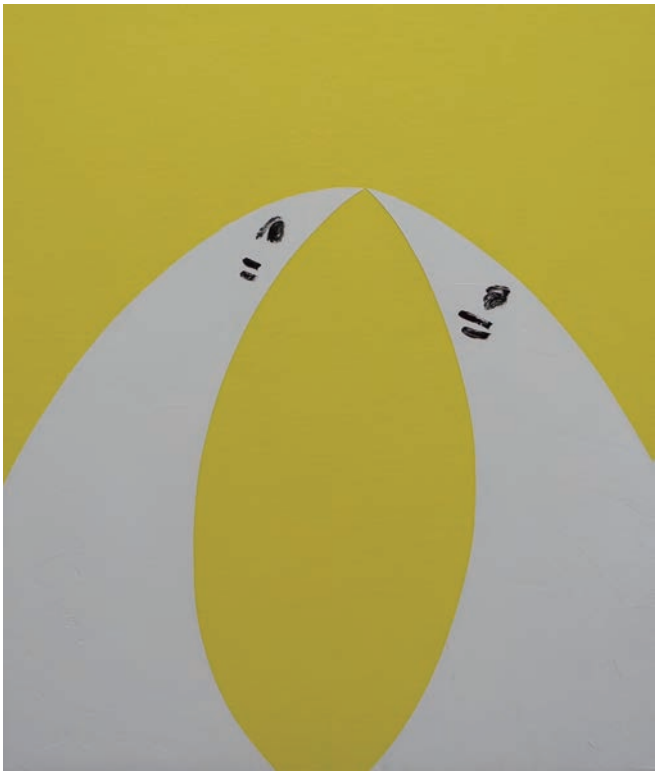
基本的に油絵の具を使って絵を描いているけど、いつも同時進行で油絵の具の他にアクリルや水彩、木炭を使っても描いている。たいていはなにか行き詰まったときに画材を変えることが多い。油絵の具で描いている絵が行き詰まったら、また続きを描く気になるまで別の絵をアクリルで描いたり、またなんとなく眠れないときなどは水彩で描いたりする。アクリル絵具は乾くのが速いので描いていて常に忙しい気持ちになる。油絵で何日も掛かる工程が一日のうちに何回も出来てしまうからその日どこまでやるかの見極めが難しい。

昨年から「男と女」というシリーズを油絵の具で描いているが、このシリーズは制作工程をあらかじめ決めているので、画面上でのいわゆるやりとりというものが少ない。あらかじめかたちを考えて描いたドローイングの中から選ぶものと、その場でテキトーに形を決めるものがある。

工程が決まっているからといって制作がサクサク進むことがいいとは限らない。効率を優先するなら油絵の具ではなくアクリルの方が早いだろうが、効率を優先すると作品は途端にダメになる。理路整然としていて誰もが納得のいくような制作と素材だけではなんだか物足りない。

無題
油彩、キャンバス
53.0×45.5cm
2016年

男と女３
油彩、キャンバス
53.0×45.5㎝
2014年



野島良太

1987年　東京都生まれ

2012年　武蔵野美術大学造形学部油絵学科油絵専攻卒業

個展
2015年　「絵くんと絵さんが絵しても絵はできない」トーキョーワンダーサイト渋谷／東京

グループ展他
2016年　「ウッホッホウホウホアートショー」波さがしてっから／京都
2014年　トーキョーワンダーウォール公募2014入選作品展　東京都現代美術館／東京
2013年　Imago Mundi　Fondazione Querini Stampalia／ベネチア［イタリア］

藤本絢子

FUJIMOTO Ayako

色面の狭間の揺らぎと虚ろ

私の近年の絵画表現で最も重要なのは色面空間の光と影である。そして色面同士が織りなすコントラストの混ざり合いや摩擦が作品のエネルギーとなっている。

それは彩度の高い補色関係の色面同士ほど高くなり、それら色面の狭間のエネルギーが自らの中に渦巻く衝動や情念のぶつかり合いに直結している。それらが具現化され、一つの作品として集積し昇華される時、私は束の間のカタルシスを得る。

作品を作り始める時、それが油彩作品であれば始めはただのキャンバスと油絵の具の固まりである。それらに様々な物理的アプローチを加え、同時にその時に表現したいものの根源を掘り下げながら思考的にもアプローチし続ける。その作業は作品を生み出そうとするその時その状況下ごとの“一度きりの答え”を探すようなものだ。すぐ探し終えることもあれば果てしなく続くかのように感じて精神的に追い詰められることもある。それでもアプローチを続けていると、ある時目の前の“キャンバスと絵の具の固まり”が“作品”に変わる一瞬が訪れる。その瞬間、私はそれまで向き合った時間やエネルギーが、ひいてはそれまで生きてきた道程や思想すら肯定されたかのような境地となる。その瞬間が降りてくるまで祈るようにキャンバスと絵の具と向き合うと、どこか儀式に興じるシャーマンになったようにも思える。

色面空間にさらに自らを没入できる“依り代”のようなものがほしい時、私は動植物などのモチーフを形成することで、より自らの中の具体的な感情を絵画作品上に擦り込むことができる。

言語化しようとすればたちまち泡のように弾け失せてしまうような微細な感情や瞬間的な衝動と、それらと光と影のように対となる虚無を、私は色面の狭間と“依り代”、つまりイメージモチーフを用いて作品として具現化し、他者と共有したいと思っている。

素材との出会いと表現

私は物心付いた頃から何かしら絵を描いていた。始めはノートに鉛筆やペンで、そこから画用紙にクレヨンや色鉛筆で。水彩色鉛筆を初めて使った時、青い線でまだらに塗ったシャカシャカとした空を水に付けた筆でなぞると、みるみるうちにトロリと滑らかな青空のグラデーションに変わっていった時の驚きと美しさは今でも覚えている。あの時の線が色面に変わる瞬間の感動がもしかすると現在の色面表現のルーツになっているのかもしれない。

様々な素材との出会いでその作家の表現は大きく変化していく。能動的に新しい素材を探すこともあれば、意図せず出会った素材からの新鮮な刺激に大きな影響を受けることもある。

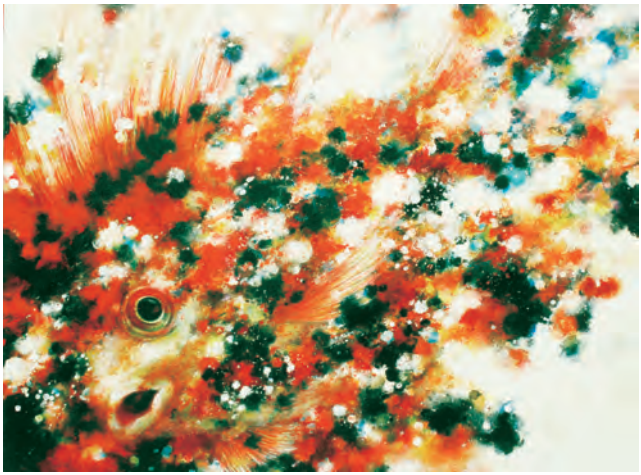
幼い頃は粘土や厚紙で立体物も無邪気に作っていたが、次第に何かを作りたいと思った時は画用紙と水彩絵の具を用意するようになっ

ていった。当時もし銀粘土工作キットや食品サンプル工作キットなど、より複雑な素材で簡単に一定のクオリティの物が作れるものと出会っていたらそこから立体造形への興味が広がりそちらへ向かっていたかもしれない。私の場合は水彩絵の具で真っ白な画用紙に綺麗な色面を重ね描きたいイメージを作りあげる、というシンプルな素材と表現を上回るそれらに出会わなかったのである。

芸術大学に進学し、より自分の表現というものと深く向き合うようになった時本格的に油絵の具という素材を使うようになった。すぐには使いこなすことが出来ずもどかしい時期が続いたが、水彩絵の具に戻らず油絵の具を使い続けたのは油絵の具自体の強固さと15世紀に確立されて以来以来長い時を超えて使われ続けてきた安定した画材としての強さに惹かれたからかもしれない。次第に私はカドミウム系顔料が放つ鮮烈な発色に自らの表現したい色面世界を見い出すようになった。油彩にしか出せないドロリとした芳醇な量感と、メディウムにより様々な表情が出せる懐ろの広さは近年の私の表現にはなくてはならない要素であり素材である。

制作の鮮度を保つには素材、表現共に新しい要素を取り入れることは有効だ。今回のスカラシップでもこの機会がなければ手に取ることがなかったかもしれない素材との出会いから、新たな作品シリーズを制作することが出来た。自らの表現の根本の軸は保ちつつ、新しい素材との出会いによる表現の深化、変化を取り入れる探究心をこれからも持ち続けたい。

夏の果 祭後
油彩、キャンバス
60.0×73.0×2.0㎝
2015年



Hollow
油彩、キャンバス
53.0×73.0×2.0㎝
2014年

藤本絢子

1985年　大阪府生まれ

2011年　京都造形芸術大学修士課程芸術表現専攻洋画領域修了

個展
2016年　西武渋谷店／東京
2015年　ワイアートギャラリー／大阪
2014年　Gallery Art Composition／東京
2013年　ギャラリーkazahana／京都
　　ギャラリー与久田／沖縄
2011年　GALLARY APA／愛知
　　GALLERYはねうさぎ／京都
　　アートサロン ESPACE KYOTO／京都
2010年　同時代ギャラリー／京都
2009年　パパジョンズカフェ／京都

グループ展他
2015年　Young Creators Award 2015優秀賞　MI gallery／大阪
　　アルメニア日本大使館設立記念交流展　Erevan City History Museum、Creative Center of Folk Arts／エレバン[アルメニア]
　　MADE in GIAPPONE　GALLERIA San FRANCESCO他／レッジョ・エミリア[イタリア]
　　ARTLEM MART　ARTLEM／上海[中国]
　　第二回うたづ Art Award 2015　大賞　ユープラザうたづ／香川
2014年　HUB-IBARAKI ART COMPETITION　茨木市立男女共生センターローズＷＡＭ／大阪
　　JYU NIN TO IRO　GALERIE-T／パリ[フランス]
　　Kyoto Current 2014　京都市美術館別館／京都
　　創 これからを創るアーティストたち　いよてつ髙島屋／愛媛（'12）
2013年　三菱商事アートゲートプログラム入選（'12 '11 '09）
2012年　トーキョーワンダーウォール公募2012入選作品展　東京都現代美術館／東京
2011年　アートアワードトーキョー丸の内2011　行幸地下ギャラリー／東京
2010年　第二回松陰芸術賞
　　ALBION AWARDS 2010銀賞
　　GALLERY銀座一丁目 in NY　hpgrp gallery／ニューヨーク[アメリカ]
2008年　ArtCamp2008　サントリーミュージアム天保山／大阪

http://www.fujimotoayako.com/

益子未知

MASUKO Michi

私の表現

移動中の電車内や、料理を待っている時間、眠りに落ちる直前のまどろみ。というような、とりたてて何も語れることのない、人生の隙間と言える時間にこそ、人は様々な事を考え、妄想しながら、その人だけが持っている時間を過ごしているのだと、私は考えます。外側から眺めただけではわからない、それぞれの時間が、人間が持っている個性を形作って行きます。私の制作は、たまたま行った場所、会った友達の写真を撮ることから始まります。そしてそのときの時間や、そのときの私の記憶をモチーフとしながら、写真を絵画に描き起こします。とくに特別ではない、日常的な時間にこそ、物事の本質が在り、人や、景色の内面から沸き上がるオリジナリティが隠れているからです。

素材と表現

絵画を制作するためには、まず作品の核になるイメージがあり、それを描くための絵の具、それを支えるための支持体が必要になります。それらの素材は、単に表現の手段として描き手に使われるだけではなく、素材と描き手の関係性も、表現の一部となって作品に現れます。

私の場合は、ある程度雑に扱ってしまっても壊れない丈夫さを、素材に求めています。繊細な素材を使い、あまり制作物の取り扱いに気を使うと、これは「作品」だという意識を、自身で持ち過ぎてしまうからです。制作途中の絵画を「作品」と認識すると、そのためにまとめることが目的になってしまい、描き方の選択肢を狭めてしまうように思います。自身の絵はあくまで「物」として扱い、私と私の絵画の間には、人と物、という簡潔な関係を築くことが私の制作にとって大切です。そのため使用する素材も、まず丈夫であることが肝要です。気を使わなくても大丈夫、という信頼が、私の制作の土台となっています。

さらに、広い意味では、キャンバスの側面の汚れ、画面についたゴミ等も、その絵が経てきた時間や、描き手との距離感を想起させる素材として、生きてくれることがあります。画面のエネルギーだけではなく、物体としての時間を感じさせる作品は、それが掛け算となって、存在感が増していくように思います。ただ完成されてるだけではなく、その絵が描かれた背景を丸ごと感じさせてくれる画面に、私は魅力を感じます。その意味での素材とは、作家自身、ともいうことができるかもしれません。その作家の生き方は、必ず制作物に反映されます。作家のそれまでに通ってきた道が全て集約され、作品はできあがります。

仏ヶ浦
油彩、キャンバス
194.0×130.3㎝
2015年

9月3日
油彩、キャンバス
116.7×116.7㎝
2013年

益子未知

1990年　東京都生まれ

2015年　東京造形大学大学院造形専攻美術研究領域修了

グループ展他
2015年　神山財団芸術支援プログラム 第１回卒業成果展　銀座アートホール／東京
ZOKEI展　東京造形大学／東京（'13）
東京五美術大学 連合卒業・修了制作展　国立新美術館／東京（'13）
2013年　unknowns　ギャラリー零∞／東京
2012年　堀商店 ショーウィンドウ展示　堀商店／東京
2011年　阿佐ヶ谷美術専門学校卒業展　BankART／神奈川
阿佐ヶ谷美術専門学校卒業選抜展　人形町Vision’s／東京
東日本大震災チャリティー展　人形町Vision’s／東京
ネズミいろ　Gallery Corso／東京
2010年　鳥がチーズを食べる　人形町Vision's／東京
益子未知×渡邊直人　文房堂B-shop／東京

宮岡俊夫

MIYAOKA Toshio

「逆さま描きの絵画論」

僕はイメージを逆さまに描いている。最後にまたキャンバスを反転させるのだが、描いている間はイメージの天地は逆さまになっている。なぜそのような描き方をするのか。

一言にして言えばキャンバスにイメージを再現するのではなく、あくまで「絵画」を成立させるということである。例えば道があって塀があって空の見える風景を青の色面、土色の色面、灰色の色面として捉える事。イメージを見て「これが木である」「これが家である」というような認識をできるだけ括弧に入れて描く。

何かを表そうとはしない。平面的に色面を様々な筆触で描いていく。中心はない。パズルのピースを一つ一つ埋めていくような感じかもしれない。どこから描きはじめてもよいし、どこで止めてもよいが大抵の場合、画面をすべて埋めることはしないで「余白」が残ったような状態で筆を置くようにしている。そのように描いていくので最後にキャンバスを反転させ完成させるとき完成図というものは画家にとっても予想できないものになる。

そうして出来上がった絵画は鑑賞者にはただの風景画に見えるかもしれない。絵画におけるイリュージョンすべてを否定するわけでないが僕はその中で、できるだけ作家の余計な意図を排除したいのだ。

僕の“Oil on canvas”

僕は油絵具でキャンバスに描いている。最もオーソドックスな形式と言ってよいだろう。

モチーフは風景で、雑誌やインターネットから“名もなき風景”を選んできて描いている。作品によって変わるのだが多くの場合でそういったイメージを画面いっぱいに描くのではなく対象のない白い（グレー）の色面の部分があって、画面の半分以上がそういった部分の作品もある。それを僕は一応“余白”と言っている。余白の部分は風景を遮断している壁のようにも見えるし、未だ何も描かれていない部分のようにも見えるかもしれない。その曖昧さというか両義性が余白というものだろう。

絵画を逆さまにして見る時、イメージは色面の構成となり余白も絵画を構成する色面と考える。そういった意味では画面上でイメージ（に見える）部分も余白も等価なのだと思う。

余白の部分についてあるいは絵画全体について言えることだが、僕は鑑賞者の感情移入や認識を跳ね返すような強度がなければならないと感じる。たとえば余白の部分は厚塗りで油絵具の物質感を強調する。

そもそもこの油絵具の物質感というのが難敵で、それをどのように用いるか、キャンバスに絵具を置く時、油絵具の物質感をどう解釈するのか。油絵具が日本に輸入されて以来日本人はそれをどう扱ってきたのかというのは“洋画”の歴史であり僕にも問われている課

題だろう。それがすぐさま絵画の表現になっていくと思われる。僕の絵画はさまざまな筆触で描く。そして基本的に絵具を塗り重ねることはしない。筆触の生々しさをそのまま定着したいからだ。油絵具の魅力はその“生々しさ”と言ってよい。油絵具は乾燥するのに時間がかかるが、塗られた状態と変わらない色と状態で定着していく。耐久性があり永い年月がたっても昨日描かれたように感じる。そうした油絵具の特性を生かした描き方を心がけている。画面全部を塗ることはしない。塗り残しの部分が必ずあり、それもまた絵画の要素だと思っている。

Landscape
油彩、キャンバス
130.0×194.0㎝
2016年

Landscape
油彩、キャンバス
182.0×230.0㎝
2014年

宮岡俊夫

1984年　島根県生まれ

2008年　多摩美術大学大学院美術研究科博士前期課程修了

個展
2016年　名前を奪われた風景　KUNST ARZT／京都
2015年　記憶の外側で　DOOR Gallery／島根（‘14）
2014年　TWS-Emerging2014　トーキョーワンダーサイト渋谷／東京
　　誰も知らない場所　ベイスギャラリー／東京
2012年　真景 -島根の風景 -　カラコロ工房地下金庫ギャラリー／島根
2007年　どこかとはどこか　西瓜糖／東京

グループ展他
2015年　ARTE FIERA2015　Bologna Exhibition Center／ボローニャ［イタリア］（‘13）
　　EXPO CHICAGO2015　Navy Pier／シカゴ［アメリカ］（‘13 ‘14）
2013年　京芸 Transmit Program KYOTO STUDIO 展　京都芸大ギャラリー@KCUA／京都
　　アートシャワー2012出品作家によるグループ展　海岸通ギャラリーCASO／大阪
　　トーキョーワンダーウォール公募2013入選作品展　東京都現代美術館／東京（‘07 ‘11）
2011年　オープンスタジオ京都　A.S.Kアトリエシェア京都／京都
　　アートシャワー2012　海岸通ギャラリーCASO／大阪
2008年　ART BEIJING2008　World Trade Center Exhibition Hall／北京［中国］

村中　歩

MURANAKA Ayumi

絵画すること

私は常に対象が必要で、日々目にしている川（水）、空、山などの自然から感・知したものを画面にどのように定着させるかということを考えながら制作しています。

過去には、存在とは何か、時間・空間とは何かということを考え、人体を描いていました。そしてより対象に迫るために、線だけを独立させた作品を作った時期もありました。しかし、対象に立ち戻る必要があると強く感じ、当時は人体へ、そして人体を取り巻く“空間そのもの”を対象化するということを考えるようになり、そこから次第に「自然」へと眼を向けるようになりました。自然との対話の中で絵画も人も同じ物質だと感じ、身体性をもって画面と向き合うようになり、再び抽象へと向かいました。色彩についても川（水）を眺めていたときに場所が変わり、形が変わっても“同じ”で「何色でもあって何色でもない」ということを学び、今は限定することなく多くの色彩を経験することが必要だと考え、描いています。

絵画とは何か、絵画の本質とは何か。なぜ抽象でなければいけないのかということも、正直まだ今の私にはわかりません。しかし、今巷に溢れているサブカルチャー的な絵画に抵抗があります。オーソドックスな姿勢で絵画の本質について問い続け、いつか新しい表現に辿り着きたいと思っています。抽象を描いている、具象を描いているということではなく、“絵画しようとしている”。それが、今の私です。

素材と表現

私の絵は、下絵などは一切考えず、綿キャンバスに絵具やパステルなどでドローイングのように描きはじめます。間接的な要素をできる限り無くすため、描く時に穂先の長い筆を使うこともほとんどありません。画面の弾力、触感を直に感じることのできるスキージーや海綿を使用し、それらを動かしながら偶然に現れる形や色彩を生かし、関連づけながら、画面に定着させていきます。絵具の乾燥時間の問題、そしてより多くの色彩を感じるためにも、色材は自分自身のスピード感に合ったアクリル絵具を使用しています。画面の内側から深く広がっていくような空間を出現させたいと考えているため、光沢が少なく自然に画面へ馴染み、浸透していくと感じるマットタイプのものを使用しています。絵作りをするべきではないという想いがあるため、完成間近と感じた時にあえて画面を潰すこと、美しいと感じる場所をあえて消すという行為を繰り返し、絵画が不意に存在者となり「私に触れるな」という瞬間の訪れを待っています。

無題
パステル、アクリル絵具、キャンバス
130.3×162.0㎝
2014年
photo by 森岡純

無題
パステル、アクリル絵具、キャンバス
130.3×162.0㎝
2015年

村中　歩

1982年　奈良県生まれ

2007年　大阪芸術大学大学院芸術研究科芸術制作専攻絵画研究領域修了

個展
2016年　ギャラリー五辻／東京にて11月19日～12月17日迄開催予定
2014年　ギャラリー檜B.C／東京（'10 '12）

グループ展他
2015年　FACE the FAR EAST極東垂直vol.4　ギャラリー五辻／東京
interactive2015　ギャラリー檜／東京
美術新人賞デビュー2015入選作品展　ギャラリー和田／東京
2013年　Drawing Show　ギャラリー檜／東京
2008年　釜山ビエンナーレ2008 Art is Now　釜山市立美術館／釜山 [韓国]
2007年　The New Face 2007　石田大成社ホール／京都
2005年　日中交流作品展　上海大学／上海[中国]

桃田有加里

MOMODA Yukari

絵画が刻む時間

私は色・形・物質感など絵画を構成するひとつひとつの要素を通じて、静止した時間の表現を深化させたいと考えています。近作においては特に物質感――絵具の流動的なテクスチャがもたらす動的なイメージに着目しています。なぜ時間の静止を表現するために動的なイメージを用いるかという問いかけに対しては、動と静は対であるがために互いの性質を際立たせることができるのではないかという意図によるものです。

例えば、作品《Swimmer 02》(2015) は人がプールから上がった後に水着に付いた水滴を体を振るわせて落とすシーンを描いたもので、当時飼っていた犬が浴槽から出た後に体をブルブルと振るわせて水滴を払っていた動きから着想を得たものです。今にも絵具の色が混ざり合い、溶け合うような動きのあるテクスチャで、水の粒が飛び散るモーションを表現するという二重の動的なモチーフをキャンバスに収めて絵にすること、すなわち動きのあるイメージをキャンバス上に停止させることは絵画の中にある時間を表現することができるように思われ、私の制作背景である「時間の静止」に大きな関わりを持つと考えます。

また、私は絵具そのものも静と動の相反する性質をあわせ持つことを見いだし、惹きつけられます。制作中の絵具は柔軟で流れたり、動いたり私を振りまわしますが、時間の経過によって硬化します。まるで私が絵に向き合った時間をこの絵の中に保存したようです。

今日にいたるまで、さまざまな人の手によって表現された絵画の中に、私は作家の生涯や密度、その絵を描くのに費やした時間が凝縮して投影されているように感じます。近年、人間という一つのゆっくりと進化し成長する生命が、スピードや効率を優先する社会にいる中で、私は絵画の中にある静止した時間に魅了されています。

私は絵画をはじめとした生命を有しない人工的な物質に時間の静止を感じ、その中に、人間の“記憶”という時とともに混濁するものを保存する力があるように思われ、非常に興味をそそられています。自身の表現は記憶を整理することや幼いころ宝箱に様々なものをつめた思い出のように大切なものを隔絶することでもありますが、作品の中に“時間の静止”という要素を織り込みたいと思ったとき、流動的なテクスチャや自然界には存在しないビビットな色彩を用いるようになりました。主観ですが人工物は時間が止まっているような印象を受けるため、私はそういったところに現実とのつながりを絶つ瞬間を感じ、キャンバスに無時間的な空間を記録するために制作を続けています。

Swimmer 02
油彩、アクリル絵具、キャンバス、パネル
65.4×53.2㎝
2015年

mama
油彩、白亜地、綿布、パネル
91.0×65.2㎝
2014年

桃田有加里

1987年　奈良県生まれ

2013年　京都造形芸術大学大学院修士課程芸術表現専攻ペインティング領域修了

個展
2014年　TIME SLICE　imura art gallery／東京
　　ぼく、雲　imura art gallery／京都
2011年　ひとになる　ARTZONE／京都
2009年　黙展　東京都庁第一本庁舎3階 南側空中歩廊／東京

グループ展他
2015年　アートフェア東京2015　東京国際フォーラム／東京(‘13)
　　Artistic Christmas vol.Ⅸ　新宿髙島屋10階美術画廊／東京
2013年　第30回上野の森美術館大賞展入賞者展　上野の森美術館／東京
　　超京都2013「現代美術@平成の京町家」　平成の京町家モデル住宅展示場 KYOMO／京都
　　奈良・町家の芸術祭 HANARART 2013　菊寿亭待合／奈良
　　山本冬彦が選ぶ若手作家小品展　Gallery ARK／神奈川
2012年　第30回 明日をひらく絵画 上野の森美術館大賞展　優秀賞(ニッポン放送賞)
　　上野の森美術館、京都府京都文化博物館、彫刻の森美術館、福岡県立美術館、／東京、京都、神奈川、福岡
　　2012 弘益大学国際美術祭　弘益大学／韓国
　　＋プリュス：ジ・アートフェア 003　スパイラルホール／東京
　　佐藤国際文化育英財団　第21回奨学生美術展　佐藤美術館／東京
　　物が 語る　imura art gallery／京都
　　ART OSAKA 2012　ホテルグランヴィア大阪／大阪
　　Melting Point ー茶の湯とアート、即興舞ー　GALLERY YUKI-SIS／東京
2011年　佐藤国際文化育英財団　第21回奨学生
　　「BIJOU ノエルの贈りモノ」展　コンセプショナルブティック＆ギャラリー・ジィオデシック／東京
　　谷崎潤一郎の愛した宿にて-それぞれの「隈」を考える-　ぎおん森庄／京都
　　超カワイイ主義宣言vol.2　山ノ内町立志賀高原ロマン美術館／長野
2010年　TOKYO WANDER WALL 2000-2009 10年!　東京都現代美術館／東京
　　ORA展 vol.2(京都造形芸術大学学生選抜展)　Court Gallery／東京
2008年　トーキョーワンダーウォール公募2008入選作品展　審査員長賞　東京都現代美術館／東京

http://yu-m.net/

山田理恵

YAMADA Rie

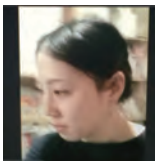
２０１１年３月茨城で被災した。食器棚やタンスがごちゃごちゃ揺れる家から外に出て母の体を抱きながら、大きくゆったりと揺れる不気味な地面と普段と同じ青空のコントラストを覚えている。津波被害はなかったが、塀が傾き屋根瓦はバラバラと落ち外壁にはヒビが入り、私の思い入れのある物もたくさん壊れていて捨てた。時の経過とともに、それまで大切にしてきた自分自身の価値観も壊れ流されたように感じるようになり、自分の中で信じられるものが頼りなく虚無感が残ったが、それと同時に他者との関係性を回復したいという強い欲求も生まれた。そして今まで感じた事がない程の「大きなもの」への想像力を私に促した事にも気付き始めた。それ以降、『間のもの』としての自分を意識しながら自分の外側を見ている。それでは何を物語るのか。目撃する事から表現が始まる。迷彩の作品は日常生活で目にしたある場面から始まっている。私の家の近くに自衛隊の演習場があり、普段から行きつけのスーパーマーケットに買い物に行くと自衛隊の車両や迷彩服を着た自衛隊員を目撃することがある。駐車場に停まっている暗い色の車両や店内の商品棚に見え隠れする迷彩服は日常とは違う緊張感を放っているが、私達と同じようにビールや惣菜を買う姿に親しみを感じつつも迷彩服の風景に擬態する機能が逆説的に際立って見えてきた。そして過去の記憶が蘇る。思えば、イラク戦争時テレビから流れる映像を見て同じような違和感を覚えたことを思い出す。各国がイラクの砂漠に合わせ砂漠用迷彩を着用する中、自衛隊は武力を用いない「人道復興支援活動」を目的としていたため、砂漠では目立つ迷彩服をあえて着用したと言われている。逆説的に目立つ迷彩服の着用が日本の自衛隊のあり方を反映していたように感じた事を思い出す。迷彩の柄は街に出たら必ず目にすると言ってもいいくらいにあふれファッションを通して当たり前に見慣れている。それらはあくまでもポップなただの柄でしかない。私にとってはこの側面の方が頭に浮かぶイメージとして色濃いが実際にはそれぞれの柄には擬態する目的の背景があり、それらは戦場としての歴史の舞台だ。ある時代のある場所での戦闘服である迷彩服はその表象を通して見える歴史の風景と言える。

ぼかす行為の向こう側からの視線

今、ぼかそうとする画面に目を落とすとフタロシアニングリーンとコバルトバイオレットが隣り合っている。絵具に置き換えられた森が画面上で混ざり合う。絵具と構造―それぞれ次元の違う森を四季花鳥図屏風のように１枚の絵とする―に置き換えられたアクチュアリティをぼかす。そしてそれは、ぼかしという技法ではなくぼかすという行為である。行為としての絵画制作を意識している。

Camouflage series Ⅱ
油彩、アクリル絵具、キャンバス
194.0×194.0㎝
2016年

Yougou no M
油彩、綿布、パネル
16.0×27.3㎝
2014年



山田理恵

1981年　茨城県生まれ

2007年　東京造形大学大学院造形研究科美術研究領域修了

グループ展他
2014年　Critical Passion　富士吉田オープンスタジオ／山梨

吉田晋之介

YOSHIDA Shinnosuke

アーティストステイトメント

アーティストは一つのことを深く掘り下げ積み重ねて表現していくべきなのか、それともスタイルにこだわらずに作っていくべきなのかは僕にはわからないのだが、とりあえず、最近僕は作品制作で心がけていることがある。自分が過去に発表した作品やテクストなどに捉われず拘らず、むしろ積極的に過去を裏切る姿勢（これがなかなかむずかしい）で、いま興味あることや身の回りで起きたことをモチーフにし、いま興味ある描き方で表現していこうとすることだ。このような考えに至った理由がある。同じものを別角度で見ることにより、そのものの本質（invariant）が鮮明に見えてくる、ということがある。例えば石膏デッサンにおいて、最初に決めた一点から動かずに見て描きはじめるより、まずは動いて様々な方向から見てみたほうがその石膏像の形を把握しやすく、より正確に描くことができる。また夫婦の生活は、ある一側面だけではなく色々な面が見えていくことにより、相手の解像感があがっていく。

それならば、別角度の視点によって描かれた絵たちが朧げな自分の輪郭を少しづつ見せてくれるのではないか、と考えた。同じ日が二度と来ないように、刻々と変わる今に忠実であれば、同じ絵は描けない。次の絵ではきっと違うことを考えたくなるはずだ。そうして今に忠実であることを意識しながら、その日の思いつき、行き当たりばったりの絵を何枚も描いていく。そうしてできたものたちを眺めたい。そうしたらそれをも否定したい。そしてまた全体を眺めたい。そこからまた、その時描きたい絵を描き始めたい。これがこれから死ぬまで、おそらく永い間制作を続けていくための、モチベーションなのではないか。

素材と表現について。

油絵具やキャンバスを買うためのお金を工面し買ってくる。キャンバスを張りパレットに絵の具を絞り出す。オイルを混ぜナイフで練って好みの絵の具になるように調整する。換気する。絵の具を筆につけキャンバスに置く。筆から伝ってくるキャンバスのザラザラとした感触や絵の具や筆の重さ、重力に応じてかたちを変える絵の具やオイルの状態などを感じながら筆を走らせていく。それからしばらく放置する。乾けばその上からまた描ける。上に色を乗せると下の色が透ける。絵肌に厚みが出る。描けば描くほど絵の具の層ができてくる。

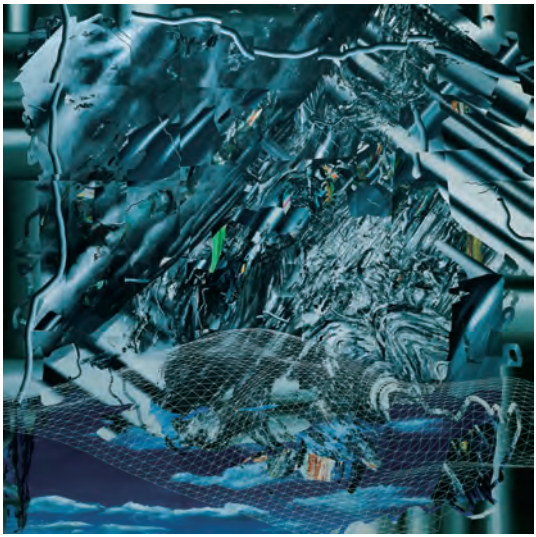
なぜ自分は油絵具を使うことに拘るのか。そう考え出して暫くしたある日、眠い目を擦りながら制作していた時に気付いた。油絵具は酸化重合による固化乾燥のため肉痩せが少ない。モネがセーヌ川のほとりであくびをしながら付けた絵の具が殆どそのままのカタチで数百年残るのが油絵具である。

平滑な液晶ディスプレイを通して世界を見る時間が圧倒的に多くなってきた今、そこからみえてくる

油絵のあり方について考えていきたい。

Days
油彩、キャンバス、パネル
200.0×200.0㎝
2015年

メルト
油彩、アクリル絵具、キャンバス、パネル
500.0×500.0㎝
2014年
photo by 加藤健



吉田晋之介

1983年　埼玉県生まれ

2016年　東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻油画研究領域（油画技法・材料）在籍

個展
2015年　吉田晋之介展 -Days-　GALLERY MoMo 両国／東京
2012年　吉田晋之介展 -知らぬ未来と忘れる過去-　GALLERY MoMo 両国／東京
2010年　吉田晋之介展　GALLERY MoMo 両国／東京

グループ展他
2016年　東京アートミーティングⅥ “TOKYO” ー見えない都市を見せる　東京都現代美術館／東京
2015年　第１回国際芸術コンペティション『アートオリンピア』　学生部門3位・建畠晢審査員特別賞　豊島区新庁舎／東京
interaction Vol.3　GALLERY MoMo 両国／東京
2014年　『見ること・描くこと』—油画技法材料研究室とその周縁の作家たち　東京芸術大学大学美術館／東京
第17回岡本太郎現代芸術賞展　川崎市岡本太郎美術館／神奈川
VOLTA NY 2014　82Mercer／ニューヨーク[アメリカ]
北加賀屋クロッシング2013 MOBILIS IN MOBILI -交錯する現在-　金沢巡回展問屋まちスタジオ／石川
日本・台湾現代美術の現在と未来 -ローカリティとグローバルの振幅-　東京藝術大学大学／東京
Terrada Art Award 入選者展　T-Art Gallery／東京
シェル美術賞アーティストセレクション(SAS)2014　国立新美術館／東京
2013年　VOCA展2013 現代美術の展望-新しい平面の作家たち　佳作賞　上野の森美術館／東京
港で出合う芸術祭神戸ビエンナーレ2013　元町高架下／兵庫
北加賀屋クロッシング2013 MOBILIS IN MOBILI-交錯する現在-　コーポ北加賀屋、GALLERY MoMo Projects／大阪、東京
2012年　分岐展vol.2　GALLERY MoMo 六本木／東京
Lapis lazuli -本瑠璃で描く-　芸大アートプラザ／東京
アートアワードトーキョー丸の内2012　長谷川祐子賞　行幸地下ギャラリー／東京
第10回中径展　府中市美術館市民ギャラリー／東京
2011年　再生 -Regenerate-　GALLERY MoMo 両国／東京
2009年　トーキョーワンダーウォール2009　東京都現代美術館／東京
シェル美術賞展2009　準グランプリ　代官山ヒルサイドフォーラム／東京
2008年　高橋芸友会賞受賞者展　高橋芸友会賞　東京芸術大学／東京
2004年　戸塚伸也・吉田晋之介展　世田谷区民ギャラリー／東京

The Scholar Perspective 20

アクリラート別冊2016

発行日　2016年7月30日発行
定　価　1,000円（本体価格）
発行所　ホルベイン工業株式会社
　　東京都豊島区東池袋2-18-4
発行人　川見良夫
編　集　初鹿野雄起

Holbein